宮崎県文化財調査報告書

第２１集

昭和５４年３月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第　２　１　集

昭和５４年３月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会におきましては、文化財指定のための調査、又開発工事等において偶然発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて、毎年報告書を刊行しております。

今回は天然記念物関係として北方町鬼の目山のツチビノキ自生原始林他１件、埋蔵文化財関係として国富町祝子園地下式古墳、延岡市赤木箱式石棺他３件を報告するものであります。

本書は、本県の文化財解明のための一資料として研究に活用していただくとともに、年々失なわれていく埋蔵文化財について十分認識していただき、なお一層の御理解と御協力を願うものであります。

なお、この調査にあたられた県文化財保護審議会委員及び県埋蔵文化財調査員並びにこの調査にあたり種々御配慮いただいた地元教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和５４年３月３１日

宮崎県教育委員会

教育長　四　本　　茂

例　　言

1．この報告書は、宮崎県教育委員会が実施した天然記念物調査及び埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。

2．掲載しているのは、昭和５１年度から昭和５３年度までに調査したものの内、天然記念物２．箱式石棺３．地下式古墳２の合計７件についてである。

3．本書の編集は、宮崎県教育庁文化課が担当し、県文化財保護審議会委員石川恒太郎が監修した。

総　目　次

天然記念物

Ⅰ　延岡市および北浦町のヤッコソウ発生地調査…… 1

Ⅱ　鬼の目山のツチビノキ自生原始林調査…… 5
（東旧杵郡北方町上鹿川）

埋蔵文化財

Ⅰ　丸山石棺群発掘調査…… 19
（西旧杵郡高千穂町大字河内字丸山７４５番地）

Ⅱ　赤木箱式石棺発掘調査…… 37
（延岡市舞野町１４７７番地）

Ⅲ　鳥の巣箱式石棺発掘調査…… 45
（東旧杵郡西郷村大字山三ケ鳥の巣１４６４番地）

Ⅳ　祝子園地下式古墳発掘調査…… 55
（東諸県郡国富町大字本庄２０９８の１番地）

Ⅴ　築池地下式古墳発掘調査…… 65
（都城市下水流町築池２５７６の３番地）

Ⅰ　延岡市および北浦町のヤッコソウ発生地調査

県文化財保護審議会委員　平田　正一

これについての調査報告は昭和４１年３月，宮崎県文化財調査報告書，第１１輯になされている。それから１０年を経過した昭和５１年１１月１７日および１８日に再度現況確認ため調査を行なった。この調査では前回末調査の市振および島之浦を踏査し，既産地の調査記録の他，新知見なども得たので報告することにした。

Ⅰ　市　振　の　発　生　地

所在地　東臼株郡北浦町大字市振４７５（市振神社々叢）

面　積　約2アール

ヤッコソウの発生地は市振漁港の集落の背後にある山地で，民家と隣りあっている。ここは市振神社の社有地の西側にあり，ここでは一般に庚申山とよばれている。山脚に庚申様の祠がある。海に向って南西の斜面で勾配の急なはば３５度位の　イ林である。林地は乾燥し，草生が乏しいので地肌が露出している。発生域は標高１５から７０m位の間にある。

シイ林の構成は，高木層にスダジイ，コンバンモナが天宮を折半しておおい，これにコジイが混っている。うっぺいは乏しく明るい林であり，大木のスダジイは径１m，高さ２０mのものもある。その他にはイヌマキ，アコウ，クロガネモチ，エノキなども高木層にある。亜高木層はタイミンタチバナ，ヤブツバキ，ヒサカキが主であり，スダジイ，イヌマキ，ミミズバイがこれにつぎ，ミサオノキ，イヌガシ，ヤブニッケイ，カゴノキ，ユズリハ，低木層にはタイミンタチバナ，スダジイ，サザンカが優占し，カクレミノ，モッコク，トキワガキ，ミサオノキ，サカキ，ヤブツバキ，クチナシ，タブノキ，イヌガシ，ヤマビワ，バリバリノキ，オガタマノキ，クロキ，イヌマキ，ネズミモチがある。早本層はタイミンタチバナ，クチナシ，ツルコウジ，ウラジロが多く，コンダ，ホソバカナワラビ，オオイワヒトデ，アマクサンダ，ササクサ，コウヤボウキ，アリドウシ，マンリョウ，センリョウ，カクレミノ，ヤブラン，サルトリイバラ，シュンランなどがある。蔓性植物にはイタビカズラ，サルナシ，サカキカズラ，フウトウカズラ，テイカカズラがある。この林分はスダジイ，タイミンタチバナ林といえよう。

ヤッコウソウの発生個所は高さに従って平均的にあり，７個所位である。一場所面積は1.５～２m^2の広さで７～８０本位発生している。保存は林分と共に勝れた状態にある。

市振の発生地は人家に隣りあっていて四季の人の出入も多く，恐らく古くからその発生は知られていたものと思われる。しかし記録されたのは昭和４１年が初めてである。北浦町市振の塩月治重氏は町役場に勤めていたが，兄弟で庚申山にメジロ採りに行きヤッコソウを発見した。当時役場の広報板に宮崎県公報のヤッコソウの写真入り記事が貼ってあり，持帰ったものはどうやらそれらしいというので医師の内宮義夫氏を通じて町教育委員会に知らせた。次いで教育長児島享氏から１月８日県教育長宛に知らされた。

Ⅱ 熊之江の発生地

所在地　延岡市熊之江町字丸田通山１７４１（熊之江神社々叢）

ヤッコソウの発生状況は１０年前の調査時と変りなかった。壮年期に達したイタジイ林に北側で隣接している，若令林は伐採後５年位の二次萌芽林であり，林内のうっぺいは高いが，おびただしい，発生場所が見られた。１㎡当り８０本を下らない叢生数であった。熊之江の発生地の特色はシイの林が若令木でないことで，他の発生地には見らえない現象である。このことは後に記述する島之浦の発生地が，５０年の幼令木であることと一到し，従来の常識を超えたものである。その推量されるところは老古木に寄生していたものが，伐木により幼令の萌芽木と変ったが，寄生を受けた地下根はこれと無関係に発生が継続されていると思ってもよいのかも知れない。

発生林の保存と発生状態はともにすぐれたものであった。

Ⅲ 須怒江の発生地

所在地　延岡市須美江町字赤下（須怒江神社々叢）

この発生地は寄生木であるシイ林が昭和４７年の冬皆伐され，その跡にスギの植林がされ，既に３ｍも成長している。現在はシイの切株さえ見られない状態でヤッコソウは完全に絶滅している。このスギ林に隣接する若令のシイ二次林も調査したが発生は認められなかった。

この発生地のシイは老令木で長年の寄生を受けて多発した見事なものであり，天然記念物として一級のものであったが残念なことに消滅している。

Ⅳ 島之浦神社々叢

島之浦町の港の集落から接続した神社の森を調査した。神社を囲んでスダジイの大木が林を作り，樹高は１４.５ｍで，径は８０cmもある。抜き伐りをしたのか，うつぺいが悪く，草本階にはアオノクマタケラン，ハチジョウイチゴが群生して地を被うが，東部を除いて亜高木，低木の両層は殆んど欠けている。ヤッコウソウの発生地としては適地と思われるが発見されなかった。

Ⅴ 記録された発生地

(1)　所在地　延岡市島之浦町（島之浦の漁業無線局の横の山林）

この記録はヤッコソウ科ツチトリモチ科植物発生地現況一覧に載せられたもので，同書に次の通り記されている。

発見者，三浦幸子（島之浦中学校生徒）発見年月　１９７１（昭和４６）　10月1971年秋，中学二

年の三浦幸子（父は漁業）が父の話によりヤッコソウの発生地のあることを知り，それを採取して島之浦中学校の平田瑞穂教諭に提示したので発生がみつかつた。発生は部落の共有地であり，しばしば伐採されている所である。このため山林は若木であり切り株が至るところに目につく。ヤッコソウの発生しているイタジイも樹令わずか５～１０年位の若木であり，その若木は大きな切り株より発生した不定芽の成長したものである。　寄生植物，イタジイ２本。

この発生地については地域の人々は記念物指定後の取扱いの不自由さを心配し，公表されることをさけたがつていると聞いている。

(2)　所在地　北浦町大字阿蘇（阿蘇神社々叢）

この記録も前記の現況一覧に載せられたもので，次のように記されている。

寄生主植物，イタジイ１本、発見者，中川一重，発見年月　１９７２（昭和４７）二月，阿蘇港をつつみこむように海岸につき出している丘が阿蘇神社の境内の山林になつている。この丘のイタジイ混生林中に発生地があつた。南斜面中服に発生していたが，現地調査の時（昭和４７年７月３０日）にはすでに伐採されてしまいヤッコソウは消滅してしまっていた。

Ⅵ　保存の要件

ヤッコソウの保存に意を注がなくてはならない訳はおよそ次の通りであろう。

第１にヤッコソウは寄抜な形態の顕花植物であり，同時に稀産のものである。日本の太平洋岸には暖帯林のシイノキ，イタジイの林は多いが，ヤッコウソウの発生地は限られた少数の地域に，しかも小面積で，断続的な分布をするもので決して寄主はあっても汎布しない植物である。

第２にヤッコソウ科は熱帯地域を主として６０種位あり，ヤッコウソ属は東亜，中米に小数種がある。日本産のヤッコウソウは地域上における科または種，属として最北張にあたっている。この種属の維持保存は日本の産地に課せられた責務である。

本文において記述した通り，従前の多発生地であった阿蘇，須怒江など社叢という社聖地が皆伐によって絶滅している。また島之浦の如く現存するも地域社会の保存の合意が得られまい場所もある。時代の推移による社会情勢の中で，保存保護の責務を果すためには，多発生地でしかも社会協力の得られる延岡市熊之江および北浦町市振の社叢林を指定することが緊急のことである。これらにより過去の多発生地を消滅した人災を償うことはできなくとも，誤ちは繰返さないことになろう。県内には既存の指定地として宮崎市野島のものがあるが，この延岡，北浦地区の指定により，四国への連続がえられる意義も大きい。今後も発生地の発見されたものは保護することを立前とすべきであろう。

Ⅶ 参 考 文 献

(1) 阿久沢栄太郎編　ヤッコウソ科，ツチトリモナ科植物発生地現況一覧　２３６総頁
１９７６（昭和５１年）

(2) 平田正一　延岡市および北浦村のヤッコソウ発生地　宮崎県文化財調査報告書，第１１輯，
８－１５頁，昭和４１年

Ⅱ　鬼の目山のツチビノキ自生原始林調査

東旧杵郡北方町上鹿川

県文化財保護審議会委員　平田　正一

Ⅰ　場　所　宮崎県東臼杵郡北方町上渡川　鬼の目山鉾岳山域

Ⅱ　地　目　山林（面積約５０ヘクタール）

Ⅲ　所有者　国有林（高千穂営林署管轄）

Ⅳ　現状の概要

この自生原始林は東は北川町，西は北方町に分水する尾根に抜き出た鬼の目（標高１４９１ｍ）の西斜面の中腹にある。ここに花崗岩の二つの一大岩柱からなる雄鉾（標高１２７７ｍ，通称オンボコ）と雌鉾（標高１２５０ｍ，通称メンボコ）が立ち，これに連続する南の深く侵食したＶ字状峡谷などまとめて抱いた山地があり，これがツチビノキを今日まで育て続けてきた原始林となっている。

鬼の目山の名は日向地誌によると，この山の東中腹の岩石中に径８，９寸の円い水晶石あり，月に輝いて遠くからは巨星の如く，鬼眼に似たる所より山の名として記されている。

この地域と北で隣接する大崩山（標高１６４３ｍ）と共に宮崎県北部に位する一大塊状花崗岩地帯に入り，自生原始林はこの基岩の上に発達している。そのため山地は急峻で，地層は浅く，基盤上を流下する伏流水のため林床は常に多湿でせん苔類の厚いマットを発達させている。基岩の露出した部分は殆んど滑らかな一枚岩となって断崖を作り，侵食されて峡谷を作っていて，これらには植生の発達は殆んどない。岩盤上に残された浅い地層では灌木の疎生がみられる。

この原始林は標高１０００ｍから１３００ｍの間にあり，温帯下部のブナ，スズタケ級の群落に入る。しかし，極めて稀産のツチビノキを構成因子とする学術上稀な特殊の森林である。以下登山道に沿って森林植相の移り変りを述べていこう。

北方町上鹿川から東に向うと一大岩柱が竝立して眺められる。これが鉾岳である。集落からの距離は約４㎞である。その中間２㎞の今村に昭和５１年森林総合利用促進事業の１つとしてキャンプ場が開設され，鉾岳までの登山道も整備されてきた。キャンプ場から落葉二次林の急坂の林を登りつめると，鉾岳の断崖がたれ下って渓谷に入った標高１０５０ｍに達する。渓谷は落下した巨岩の累積で埋められているがた易く渡れる。

渡河点の基岩上にはウバダケニンジン，タマガワホトトギスが群生し，灌木のオオヤマレンゲなどの稀産植物が現れる。登山道はここから谷にそって急坂となる。この森林はツガ林で下層はスズタケの密生地となっている。ツガ林を抜けると北向きの急傾斜の山地となり森林は暗く，陰湿となり，疎生の林地にツチビノキが点々と見られる。この森林構造は宮崎県総合博物館学芸課の荒木徳蔵・金丸文昭の調査によれば第１表の様である。

第1表　渓流南側のツチビノキ自生林群落

層　　別	植　　物　　名
Ⅰ　　層 8 m 以上	ミズナラ，ツガ，ナツツバキ，ブナ，ヒコサンヒメシャラ　など
Ⅱ　　層 8 m～3 m	タンナサワフタギ，リョウブ，ベニドウダン，コミネカエデ，シロモジ， ヤマグルマ，コハクウンボク，ムシカリ　など
Ⅲ　　層 3 m～0.8 m	コバノミツバツツジ，ツガ，スズタケ，タンナサワフタギ，ホツツジ， ヨウラクツツジ　など
Ⅳ　　層 0.8 m～0.3 m	スズタケ，シンガシラ，ヨウラクツツジ，チャボシライトソウ， ツチビノキ　など

標高：1100 m，北面，傾斜40°

10×10 m方形区測定，1978，6．7

ツチビノキ個体数　約40本／10×10 m内，

高さ：50～30 cm

この森林をぬけると標高1200 mの渓谷の上流に出る。ここは平に侵食された一枚岩の露出岩の渓流であって，渓側は伏流水がにじみ出ている。この湿った林地はヨウラクツツジ，バイケイソウ，ササユリ，ソクバネウツギなど稀産植物ばかりの見事な群落が発達し，宮崎県内においては必敵するものがない。保存が良好で原始の姿そのものである。

渓流ぞいの群落をぬけ，北側陽地の山地に向うと間もなく，ゴヨウマツ，ブナ，ミズナラ，ツガ，アケボノツツジなど優占種のつかみ難い群落となる。ここの林床は湿潤でオオミズゴケのマットが発達し，伏流水の流れが見られる程じめじめしている。高木は土層の浅いことと多湿のため低木化し，陽光が射入して明るい林となっているが，この林がツチビノキの絶好の発育適地となって今日まで種を温存してきた所であるらしい。この自生地内において最もよく伸長して分枝し，古木となったものが集合している所である。前記，荒木，金丸の調査による群落構造は第2表の通りである。

ツチビノキに続く上部の群落は典型的なブナ，スズタケ群集となり，2 mを越えるスズタケの密生が現れ，ツチビノキは出現しない。露出の巨岩にイワタケが密生し，フクロシダが現れるが植相は単純である。尾根に登りつめて北側の渓谷に下るとブナ，ヒメシャラの林の下に再びツチビノキの稚樹が現れてくるが高木林下で暗い。谷を下るとしばらくして雄鉾の南断崖の流下した明るい林に出る。この附近も樹下にツチビノキの稚樹が点在する。谷川の水はここから一気に渓谷を降下するが，急峻の水辺にオオバギボウシが群生している。

第2表　溪流北側のツチビノキ自生林群落

植物名	被度	群度	植物名	被度	群度
Ⅰ　層（8 m以上）			ネジキ	1	1
ブ　ナ	1	1	ツチビノキ	1	1
Ⅱ　層（8 m～3 m）			リョウブ	1	1
イヌツゲ	3	1	ツクバネウツギ	1	1
ベニドウダン	2	2	シロモジ	1	1
アケボノツツジ	2	2	Ⅳ　層（0.8 m～0.3 m）		
ノリウツギ	2	2	スズタケ	3	4
ヨウラクツツジ	2	2	マツバスゲ	3	4
ツ　ガ	2	1	ヒメノガリヤス	3	4
ヒメシヤラ	2	1	ベニドウダン	3	2
ナツツバキ	2	1	フクオウソウ	2	3
ヤマボウシ	2	1	ヨウラクツツジ	2	2
アカシデ	2	1	ガクウツギ	2	2
ミズナラ	2	1	シロドウダン	2	2
ツクバネウツギ	1	2	ツクバネウツギ	1	2
タンナサワフタギ	1	2	ススキ	1	2
コハクウンボク	1	1	ツチビノキ	1	1
ゴヨウマツ	1	1	ミズナラ	1	1
ヒナウチワカエデ	1	1	イヌツゲ	1	1
カマツカ	1	1	ナガバノモミジイチゴ	1	1
リョウブ	1	1	アカシデ	1	1
Ⅲ　層（3 m～0.8 m）			ヒヨドリバナ	1	1
スズタケ	3	4	ヤマシロギク	1	1
ベニドウダン	3	2	モ　ミ	1	1
コバノミツバツツジ	2	2	ツ　ガ	1	1
ヨウラクツツジ	2	2	Ⅴ　層（0.3 m以下）		
アケボノツツジ	2	1	オオミズゴケ	5	5
ミズナラ	2	1	ツ　タ	1	1
イヌツゲ	2	1	フクオウソウ	1	1

標高：1180 m，方位S70E，傾斜30°，10×10 m方形区測定，1978．6.7

ツチビノキ個体数　約15本／10×10 m 内，高さ　100 cm～30 cm

雄鉾の南壁は所々に支えられた堆土上に草生があり，ミヤマガンピ，ウバダケニンジン，ササユリ，コメツツジ，オオバギボウシなどの稀産植物がある。南壁から下部にはブナ林が続いて下るが，土層が浅く森林は明るい。この中にもツチビノキは散生している。雄鉾と雌鉾の分岐点まで登りつめ，ここから雌鉾に登はんできる。北面は灌木が茂り頂上下4 mまで植生がある。壁面の植生は風当りが強烈で樹

形も風衝形となっている。アケボノツツジ，ホツツジ，ミヤマガンピ，ササユリなどの外，ツチビノキやキソチドリなども見られる。尖峯附近にはゴヨウマツや変異品のテリハツクバネウツギがある。雌鉾の頂端は鈍円の丘状露岸で西南面は削り立っていずれも一草もよせつけない。

雄鉾は西南面は断崖であるが上部は森林に包まれ，ブナ，ツガ，ゴヨウマツを上木としたスズタケ密生林で，林下にはツチビノキの稚樹が散生している。以上はツチビノキ自生原始林についてその概要を述べたが，次にこの森林を構成する稀有の植物要素について説明する。

V　原始林構成の特殊植物

(1)　ツチビノキ（ジンチョウゲ科）

ツチビノキは１９３６年（昭和１１年）８月４日，当時宮崎高等農林学校の嘱託として植物採集を行っていた吉江清朗が，北川村の榎峠で発見したものである。この標本は東京帝国大学に送られ，原寛が和名をツチビノキとし，新種として発表した。学名は，属名の改変が２回行われ，今はガンピ属に入れられている。和名のツチビノキは採集地北川村の祝子川部落で昔から呼ばれた，土に生えるガンピの木の意味の地方名をそのまま標準名としたものである。ガンピ類は岩上に生えるが本種は土に生える特性からの名である。

昭和３２年７月１１日宮崎県社会教育課はツチビノキの分布範囲を知るために，高千穂線以北の県北小中学校に依頼調査を行った。家庭において山林作業などでツチビノキの名が使用されているかどうかについて問答を求めたが該当の学校は一校もなかった。この調査によってツチビノキの分布は榎峠を中心とした極小の範囲に限られるものと判断されていた。昭和４９年の秋，１１月３日，九州地区の大学インターカレッジの山岳部門の登山が，この地域の鬼の目山から国見山周辺で行なわれた。その際，宮崎県林務部森本辰雄技師が指導員として参加し，林下に黄葉して垂下したツチビノキの異様な姿を発見した。

昭和５２年６月１３日前記森本氏の案内でこの自生地の調査する機会を得た。ツチビノキ自生地の範囲は発見の経過の通り，これを図上にプロットすれば，鬼の目山頂を東西にふり分けて，榎峠，落水の滝から鉾岳間は僅かに４㎞である。地球上における種の分布がこの様な極小地域に封じこめられていることは極めて稀であろう。今後分布は更に広がる予想は考えられるが，大幅の拡大は期待されないだろう。

最初の発見地である榎峠の落水の滝（標高８００ｍ）附近は昭和３０年代の伐採により，全域皆伐の裸地となり，ツチビノキの生育適地の環境を失っている。その生育地は乾燥し，辛うじて３０㎝前後のものが稀に見かけられる程度になってしまった。発見当時の記述では高さ２ｍに及ぶ灌木で，山中湿気の多い陰地に生ずるとあるが，現在ではこれを見ることは不可能である。

ツチビノキの成因は明かでない。世俗にミツマタとガンピの交雑種などともいわれるが，交雑の機

会はなさそうである。現在種では屋久島宮浦岳に局地分布をするヤクシマガンピと類縁は近いが，形態が大幅に異っている。

鉾岳のツチビノキは高さ１ｍ前後で，幹の太さは径１５～２０㎜までである。葉の大さは１５㎝の長さに，６㎝幅で，７枚位が枝先に集り，下面は白っぽい。集まった葉の中心に，ジンチョウゲに似た花を開く。初め赤いが開くと白色か，薄いピンクを帯びる。枝は二又に分れ，一年に５～６㎝伸長する。ガンピ類は一般に乾燥の岩上，草原などに生えるが，本種は陰湿の伏流水が流れる林下を最適地としている異様なガンピ類である。

（２） ミヤマガンピ（ジンチョウゲ科）

典型的な襲速紀植物で，紀州の大台ケ原，四国の石槌山をへて九州に入り宮崎県祖母山系まである。鬼の目山は分布の南限にあたる。花崗岩の断崖の壁面に作られた僅かな堆土に生育する。個体数が極めて少ない。６月下旬米粒大の白花を開いて芳香は極めて強い。

（３） ツクシヒトツバテンナンショウ（サトイモ科）

宮崎県産植物で名づけられたが，今でも霧島山を含めて宮崎県以外にはない。県内の産地は標高約７００ｍからの上部の温帯林下にあり，それ以下は通常のマムシグサとなる。南部は鰐塚山，尾鈴山から大崩山まである。この自生地内ではブナ，ヒメシャラの樹下に点在するテンナンショウ類は全て本種である。

（４） チャボシライトソウ（ユリ科）

愛知以南，四国，九州に稀にある。九州では佐賀県黒髪山，鹿児島県稲尾岳，屋久島，宮崎県では尾鈴山，大崩山と鬼の目山だけで，断続的に分布する。どこでも陰湿で水の滴る湿潤のせん苔類のマット上に生える。この自生地では渓谷の南側の林床に点生する。

（５） ササユリ（ユリ科）

伊豆半島から四国，九州にあり，九州の産地は宮崎県だけである。ササユリは美々津の海岸から標高１６４３ｍの大崩山の山頂まである。個体数が少なく稀産品で，水はけの良い岩面の堆土に生える。鉾岳の風衝地では低いスズタケの間にある。

（６） バイケイソウ（ユリ科）

北海道から九州までの温帯林の陰地に生える。自生地では水の湧く渓側の近くに多い。鬼の目山はここから市房山に連なる南限線上の東にあたる。

（７） タマガワホトトギス（ユリ科）

渓谷の岩場の滑面について，茎は先が垂下する。南限線は鬼の目山から市房山に至る。個体数は少なく稀産種である。

（８） キソチドリ（ラン科）

北海道から屋久島まであるが，高所にあるもので個体数が極めて少ない。宮崎県内では大崩山，祇園山と鬼の目山の三ケ所で少数がとられている。九州の本土ではこの山塊だけが産地で他県には知られていない。

(9) オオヤマレンゲ（モクレン科）

九州では標高１０００m前後の高所に稀産し，南限は霧島山である。６・７月に香りの強い白花が優雅に開く。

(10) ウバタケニンジン（セリ科）

祖母山の別名をとって名付けられた植物であり，四国の高山から九州に入り，祖母山の稜線を本拠地にしているが，南限は鬼の目山となる。乾燥した岩石地や割目に生える。

(11) ヨウラクツツジ（ツツジ科）

九州の特産種で，九重山，祖母山，雁俣山を廻る山塊にある。鬼目山はその南限地となり，恐らく種形成の中心附近にあるものと推定される。花はツツジ中の異色のもので，1〜1.5cmの小豆色の筒形花を垂下する。葉面は青緑色で下面は粉白色を帯びる。この自生地内では２mに及ぶものが群生し，県内の他の産地に比較して抜出て優れた群落を作っている。峡谷の側岸に樹叢を被った眺めは，希色の葉により妖気を感ずる異観がある。

(12) コメツツジ（ツツジ科）

北海道から九州まである。この鬼の目山と市房山を結ぶ線が生育の南限である。乾燥した岩につくツツジで，個体数はどこでも極めて少なく，この自生地でも数株を認めたに過ぎない。花は７月，白色米粒状である。

(13) テリハツクバネウツギ（スイカズラ科）

標高８００m位から上部にあるコツクバネウツギの変異品である。自生地の雌鉾の風衝地に多いもので，通品の倍に及ぶ大きさの葉と，濃色で厚く，殆んど無毛で上面の光沢が強いものである。花は黄白色で大きい。県内では本山以外では見かけられない。

(14) ツクバネウツギ（スイカズラ科）

本州，四国，九州に分布し，その南限は宮崎県門川町になっている。海岸から温帯林まであるが，断続的に分布する種で，自生地における個体数は何所でも群生する。鬼の目山では渓谷沿いに多いが，葉が大きく着花数が少ないことが平地のものと異っている。

(15) イワタケ（イワタケ科）

北海道から九州，朝鮮半島から満州にある花崗岩質の岩上のみに生育する地衣類である。分布の南限域は鬼の目山と市房山の線上にある。食用となる稀産のものである。

Ⅵ　保存の要件

鬼の目山西中腹の鉾岳周辺域におけるツチビノキの自生するブナ林について調査の結果を述べてきたが，この自生地は次の理由により天然記念物として指定し，保存を計ることが急務と考えられる。

(1)　ツチビノキはこの原始林構成の最重要植物であって，日本固有のものであり，その分布域は宮崎

県鬼の目山域の東西4㎞内が知られているに過ぎない。地球上における稀有の局地植物であって，今後新しい分布地が確認されることは極めて薄い。

(2) 近来，世界的規模において進められている有用植物等の遺伝子保存の観点からも，ツチビノキの様な局地分布にとどまる弱い繁殖力の遺伝子は学術研究用として積極的に保存しなければ消滅のおそれがある。

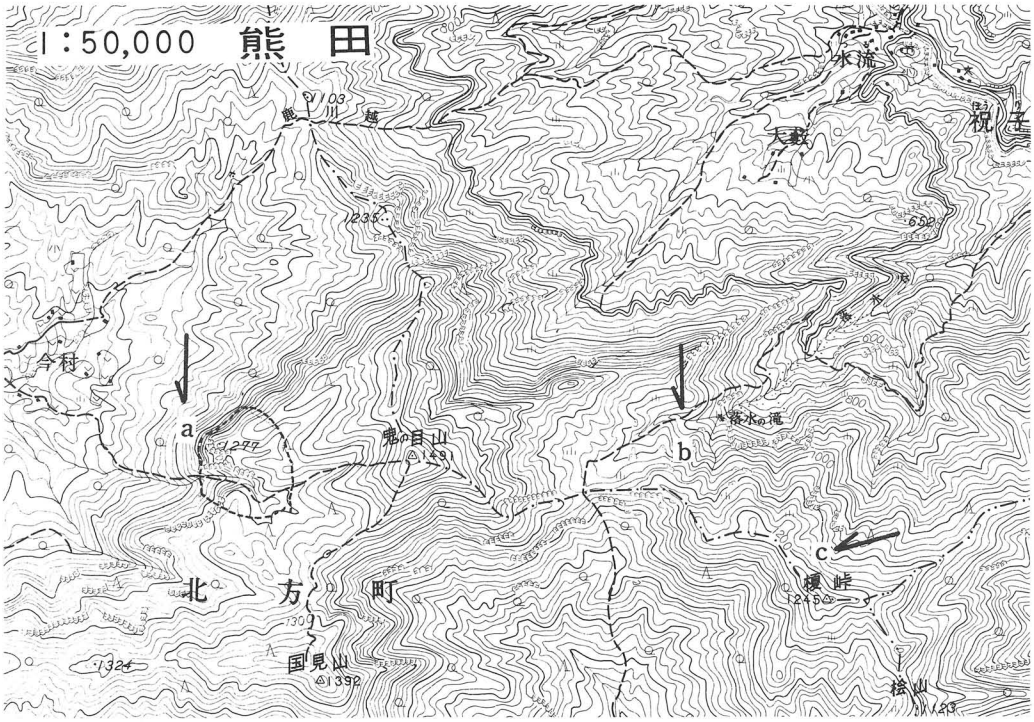
(3) この森林は九州においては高所の温帯林であり，花崗岩と陰湿の林床など特殊の環境の中で発達したもので，これに対応して南限植物として，バイケイソウ，ミオヤガンピ，ウバタケニンジン，コメツツジ，ヨウラクツツジ，イワタケ，断続分種としてツクバネウツギ，断続で個体数の少ないチャボシライトソウ，キソチドリ，その他稀有分布のササユリ，ツクシヒトツバテンナンショウなどを包蔵し，加えてそれらの優勢の群落は県内の他の産地に比較して圧倒的に優れている。ツチビノキの保存のための森林環境の保存において最も適した候補地である。

(4) この原始林はこれまで社会と隔絶され良好な状態で保存されてきたが，今日鬼の目山山ろくに設けられたキャンプ場，並に整備された登山道によって登山人口は積極的に増加してきた。このまま放置すれば稀有植物は衰微し学術的に無価値なものに変様することは明らかである。従って早急に天然記念物として指定し，登山並に自然観察のための物件として利用する教育的方向づけの中で保存して行くべきである。

終稿に当り，この自生温帯林の森林構造の調査資料の御貸与を頂いた，宮崎県総合博物館学芸課主任荒木徳蔵氏および同主任主事金丸文昭氏の御厚意を感謝します。

文　　献

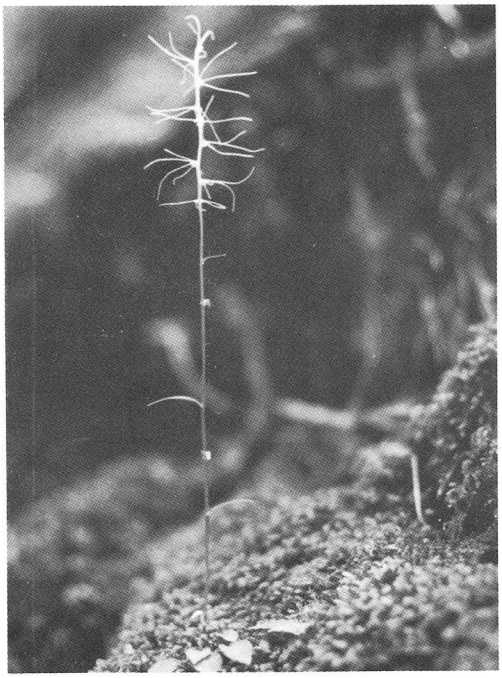
1. 平部嶠由　日向地誌，９２１総頁，日向地誌刊行会　宮崎　昭和４年
2. 原　寛　東亜植物考（其１３），植物研究雑誌，第１３巻，１７１～１８０頁，昭和１２年
3. 中井猛之進　東亜植物拾遺（其４），植物研究雑誌，第１３巻，８７２～８９７頁，昭和１２年



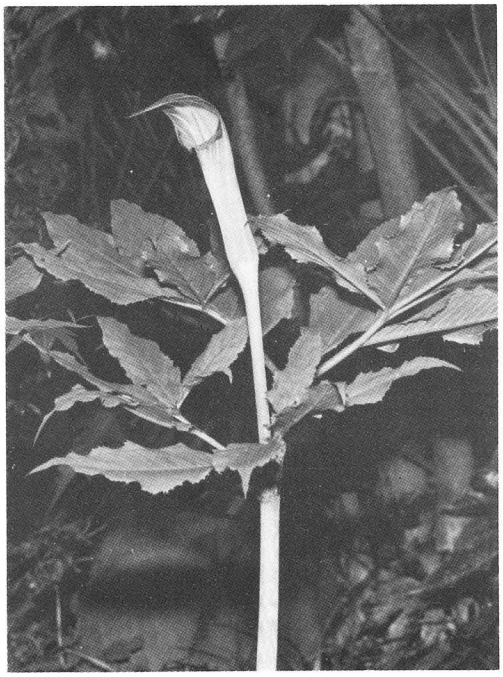
a：鉾岳　点線内自生地　　b：旧自生地　　c：最初の発見地

ツチビノキ

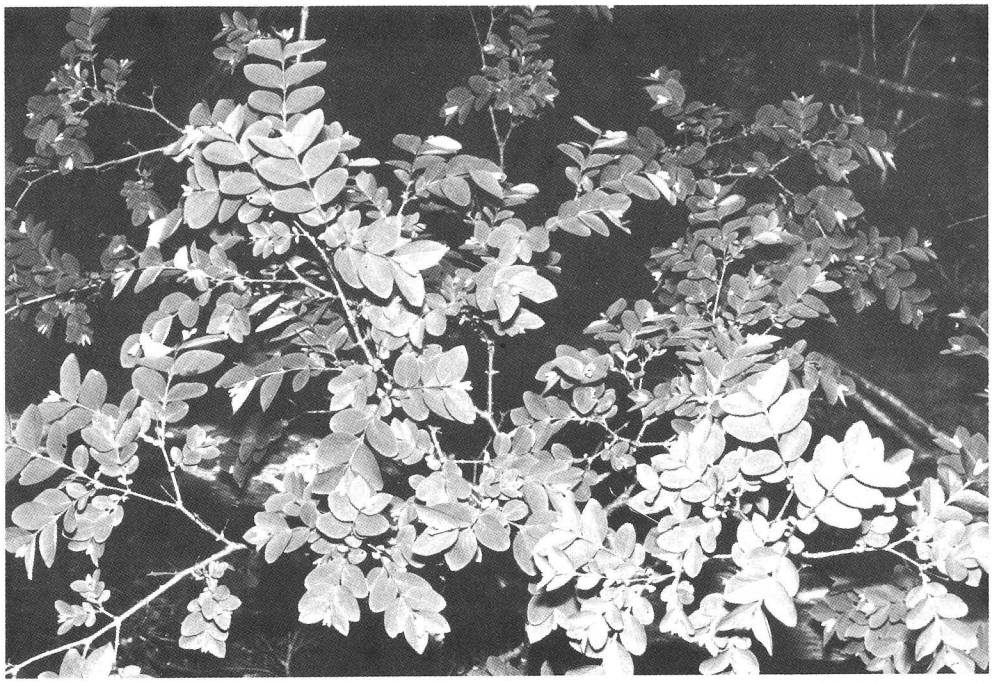
ツチビノキの全景



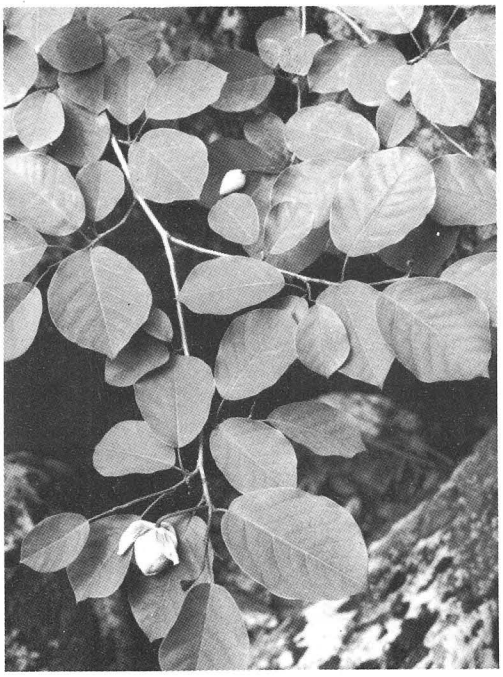
せん苔上のチャボシライトソウ



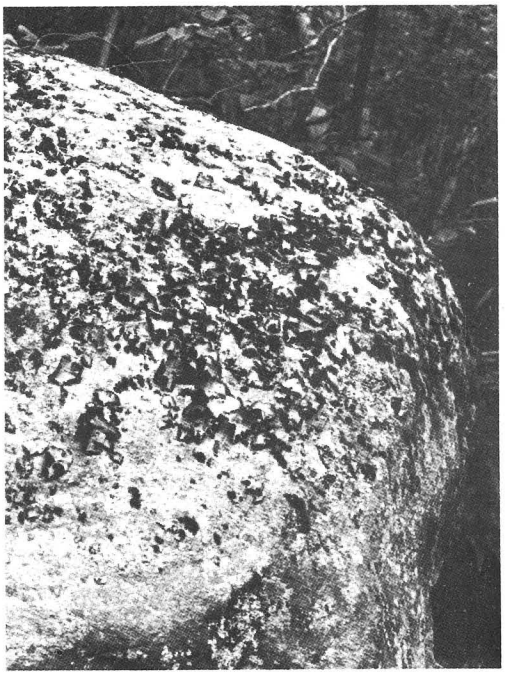
ツクシヒトツバテンナンショウ



鉾岳南壁上のミヤマガンピ



溪側のオオヤマレンゲ



露出花崗岩上のイワタケ

鉾岳南壁につくササユリ

溪側の樹下に育つヨウラクツツジ

Ⅰ　丸山石棺群発掘調査

西旧杵郡高千穂町大字河内字丸山７４５番地

県文化財保護審議会委員　石川恒太郎

長崎大学医学部教授　内藤　芳篤

本　文　目　次

Ⅰ　所　在　地 …… 21
Ⅱ　発見の動機 …… 21
Ⅲ　調査の経過 …… 21
Ⅳ　発掘の結果 …… 22
Ⅴ　古墳の特徴と年代 …… 24
Ⅵ　石棺出土人骨の歯 …… 25

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置図 …… 28
第2図　石棺の所在地及び周辺地形図 …… 29
第3図　52－A号箱式石棺実測図 …… 30
第4図　52－B号組合せ式石棺実測図 …… 31
第5図　52－B号組合せ式石棺副葬品実測図 …… 32

図　版　目　次

図版1　(1)　遺跡遠景 …… 33
　　(2)　52－A号箱式石棺上部構造 …… 33
図版2　(1)　52－A号箱式石棺 …… 34
　　(2)　52－B号組合せ式石棺蓋石 …… 34
図版3　(1)　52－B号組合せ式石棺 …… 35
　　(2)　52－B号組合せ式石棺（石棺東寄りから出土した歯）…… 35
図版4　副　葬　品 …… 36

Ⅰ　所　在　地

西臼杵郡高千穂町大字河内字丸山７４５番地で，同町奥鶴地区の北部に当る丘地上である。ここは熊本県との県境に近い所で，北方の県境にある丘地から南下している標高６２０ｍの細長い丘地の東側斜面にあった（第１図参照）。この細長い丘地は箱式石棺群の存在する所で，筆者は昭和４５年２月ここで発見された石棺を調査したことがあり，その結果は昭和４７年３月宮崎県教育委員会発行の「宮崎県文化財調査報告書・第１６集」に記したが，それまでにこの丘地で箱式石棺８基と横穴２基が発見されている。それで今回発見された石棺２基を加えれば，この丘上で石棺１０基と横穴２基が発見されたのである。

Ⅱ　発見の動機

今回発見の動機は高千穂町で，この丘地の東斜面に南から北に山裾を廻って行く道路を開さくして掘り当てたのであった。それで同町教委から県文化課に連絡してきたもので２月２日同町教委の飯干次長の車に便乗して田ノ上哲氏（宮崎考古学会々員）とともに高千穂町に出張した。

Ⅲ　調査の経過

昭和５２年２月３日町教委の車で現地に行った。丘地は栗林（図版１の１）であるが，そこに西南から東北の方向に道路が造りかけてあり，東北に１基（図版１の２）と西南に１基（図版２の２）の２基の石棺が出ていた。その中間に平たい大きい石が１個出ていたがそれは自然石で古墳ではなかった。それで東北のものをＡ号墳，西南のものをＢ号墳と仮称した。発見の順で言えば東北のものを１１号（９号石棺）西南のものを１２号（石棺１０号）と呼ぶべきであろう。そして東北のものは千枚岩の自然石を立て並べて棺の身となし，その上に同様の千枚岩を並べて蓋としたものであるが，西南のＢ号は凝灰岩を四角に切ったものを組合せたもので，この両棺の距離は５ｍであった。しかしＡ棺はほぼ堀り出されていたが，Ｂ棺は蓋の形が掘られていただけで大きい一枚岩の蓋が出ていた。これは町教委でわれわれの調査の時間を短縮するために行われたものと承ったが，実はこのような配慮は無用である。またこれも町の配慮で，われわれの到着前に早朝両棺前で読経して頂いたということで感謝した次第である。この日非常な強風で厚い霜柱が立っていたが，先ず両棺の写真を撮り，Ａ棺の実測図をとり，一方でＢ棺を掘り出したが，こちらは素晴らしく立派な石棺であった。

２月４日町教委の車で田ノ上氏と現地に行った。今日は昨日のように風が吹かない。まずＡ棺を精査してＢ棺に移ったが，一枚石の蓋石を開けるのはなかなかであった。また石棺内は図版３および第４図に見るようにほとんど土が流入していたので，この土を上方から順次に除いて行ったが，調査が進むに従って篩で入念に土を調べるようにした結果，人の歯や小さい平玉などが発見されるようになった。し

かし棺が深く外部からは掘りにくくなったので，側石の実測図をとり，雪が降り出したので作業を終り，棺の上に蓆をかぶせ，その上に梯子を渡して風で舞わないようにし，さらに棺のある穴の上に竹を渡し，テントを張って帰った。

2月5日三田井の宿で起きてみると雪がちらちら落ちていた。この分では現場は大変な雪であろうと思って町教委の車で田ノ上氏と出発したが案の条麓で連絡があり，車はチェーンを巻かねば上れないという。そこで車を降りてチェーンを巻いてもらって上ったが，石棺の上には雪が蔽っていた。それで交替で焚火に当っては堀ることにして側壁の石をはずして掘り，最後に底石を出し，実測図をとって夕方調査を終り，協力して頂いた町教育委員会の人々や地区の人々と終了式を挙げて帰った。

Ⅳ 発掘の結果

A. A墳の構造

A墳は前に述べたように千枚岩の自然石を並べて箱形の石棺を造ってその中に屍体を葬っていたもので屍体はすでに消滅していた。この丘地は地表からだいたい60cmの深さに腐蝕土があり，その下に55cm内外の深さまで褐色の粘土層があり，さらにその下に黒褐色粘土層があるが，この石棺は黒褐色粘土層の表面から深さ東側で50cm，西側で20cm，長さ140cm，幅40cmの土坑を掘り，この周囲に千枚岩を建てて側壁とし，その上に千枚岩を平たく並べて蓋としていたもので，棺の方向はほぼ東北より西南に向いていたが正確に言えば第3図に見るごとく，石棺の中軸線は南北の方向より50度西に傾いていた。底石は敷いてなかったが，石棺のある位置が丘地の東縁部で東部は急激に傾斜しているので，長い年月の間に東側が崩れ落ちて石棺の形に変化を及ぼしたように考えられた。それほどこの石棺はイレギュラーであった。

初め見たとき蓋石があると思ったのは実は蓋石ではなくて，西側の側壁を形造っていた6枚の石が東側に倒れ込んだと思われる状態であった。東側の側壁は第3図に見られるように4枚の石が立っていた。しかし第3図上と左の実測図によると，蓋石らしい6枚の石はかなり高い位置にあるからやはり蓋石と認めざるを得ない。そうすると西側の側壁の石がなくなるが，道路を造った際に掘り出されたものではなかろうか。西方の栗の木の根元などに掘り出された石が多く置いてあったから，恐らくそれらが拾い上げられたのであろう。

要するにこの石棺は千枚岩の自然石を立て並べて四壁を作り，その上に蓋石を冠せただけの普通のいわゆる箱式石棺で，底石を敷いていない形式のものであるが，前記の6枚の石が蓋石であれば棺の深さは50～60cmとなる。この石棺には遺物はなかったが，棺外に弥生式土器の破片が1個（図版4）あった。

B. B墳の構造と遺物

この古墳の石棺は軟質の凝灰岩を四方に並べて棺側を作り，大きい石を載せて蓋としたもので，第4図に見られるようにほぼ東西の方向に造られているが，その構造は南側の壁石は，長さ90cm，幅75cm，厚さ10cmの長方形の石2枚を並べて長さ180cm，高さは底部を外側30cm，内側20cmを地下

に埋込んで高さ内側で５５cmの南壁を造り，北側の壁は長さ１５０cm，幅８０cm，厚さ１０cmの石と長さ６０cm，幅８０cm，厚さ５cmの石を並べて北壁とし，これも内側で３０cm，外側で５cmを埋め込んで高さ５５cmの壁を作り，東壁は長さ４０cm，幅４０cm，高さ７０cm，厚さ１０cmの一枚石を建てて東壁とし西壁もほぼ同様の１枚石をもって造っているが，東壁石は２０cm，西壁石は１０cmを埋め込んでいる。そしてこれらの四壁は基部が広く，上部はやや狭ばめられていた。蓋石は長さ１３０cm，幅中央で８５cm，厚さ１５cmという大きな石であり，それを以て東から西を蔽うてもなお不足であったので，西部は長さ４０cm，幅７５cm，厚さ１３cmの石をもって塞いだが，なおその間に１０cm内外の間隔があったのでこの間を大小の数石をもって塞いでいた。それで蓋石は右の大石のほか第３図に見られるような大小の数石をもってその間隙を塞いでいた。その状況は同図に見られる通りである。このように蓋石に１０cm内外の隙間を生じたことは，蓋石が東西両端において３０cm内外外側に出ることになった結果で（第４図上段），これは上からの砂の流入を塞ぐためであったと思われるが，長い年月の間にはこの間隙から砂が流入して同図に見られるごとく棺内には砂が高く流入していた。

底部は厚さ１cmないし２cmの平たい石を一面に敷きつめてあったが，棺の内側には四壁，天井，底ともに朱が塗られており，特に注目されたのは，西の側石の向って右上に長さ１３cm，高さ８cmの三角状の彫り込みがあり，これにも朱が塗られていたが，意識的に作った彫り込みと思われるけれども，何を意味するかは知ることができない。また朱は棺の内側ばかりでなく蓋のかぶさる側石の上端部にも塗られていた。これらの状態は第４図に見られる通りであった。

遺物は床面の東南隅に刀子２振（① ②）があり，東方の北寄りの所に，さらに刀子２振（③ ④）があり，棺のほぼ中央部に小さい骨片が２片ずつ２ヶ所（⑤ ⑥ ⑦ ⑧）に存在した。また東北隅から西方に５０cm隔たった北壁に接した所に鉄環が折れて１塊となって在った。さらに棺の東部一帯（点線及び図版３の２）から硬玉製の平玉５５個が散乱して出土し，この同じ地点から人の歯３４本が発見され，棺の西端に近い所から小児の歯７本が採集された。

以上の遺物配置の状況から考えるに，この石棺には東を頭にした大人が足を西に向けて葬られ，さらに小児が頭を西にして葬られていたものと思われる。

なおこのB棺のあった場所は地表から４０～４５cmの深さに腐蝕土があり，その下に褐色の粘土層が深く入っているが，この石棺は褐色粘土層の中に深くその側石の底を２m，棺の蓋石の上端を１０５cm下に置いて掘り込まれていた。従って盛土（封土）はなかったのである。何故ならば封土を盛るのであればこのように深く地表下に埋める必要はないわけである。ここにこの古墳の特殊性を認めるのである。

C．遺　　物

以上に述べたごとく，この古墳から発見された遺物は刀子４振と鉄環１個，平玉５５個，小骨片および大人と小児の歯であった。以下各遺物について記そう。（図版４および第５図）

①　刀　子

先端が折損している。現長8.3cm，茎長3.3cm，木質を若干残しているが茎幅0.8cm，厚さ0.4

cm。身の長さ5cm，身幅2cm，棟幅0 3cm。

② 刀　子

先端を折損している。現長7.7cm，茎長2.7cm，茎幅0.7cm，茎厚0.3cm。身長5cm，身幅0.8cm，棟幅0.3cm。

③ 刀　子

身の先端を折損している。現長7cm，茎長4cm，柄部が銹化しているが柄幅1.7cm，厚さ1.5cm。身長3cm，身幅1cm，棟幅0.4cm。

④ 刀　子

柄端を折損している。関の所より折れているが復原される。現長7.5cm，茎長2.5cm，柄部に木質を残しており，柄幅1.3cm，柄厚1cm。身長5cm，身幅1.5cm，棟幅0.3cm。

⑤ ⑥ ⑦ ⑧ 小骨片。

⑨ 鉄環　1個。4片に折れている。復原すると第5図右上のようになる。

何に使用されたものか不明であるが，幅約1cm，厚さ0.2cmの円形に折り曲げて直径1.8cmの環としたもの2個に同様な鉄板で直径7.5cmの環を通したものである。

⑩ 平玉　55個。外に3個の破片がある。

ここにいう平玉は一般に言われている平玉（円面に平行して穿孔されている大形のもの）とは異なり，極めて小さく，玉の直径は0.5cm内外で厚さは0.1～0.3cmの薄いもので，石質は硬玉で，白または緑を帯びている。細長い小さい棒に穴のある石を薄く輪切りにしたようなものである。われわれは昨年の夏北諸県郡高崎町の栗巣遺跡を調査した際，弥生時代後期の土器が数多く発掘された時，この種の玉1個を発見したのであったが，同じ種類の平玉の発見は，この遺跡の時代考察に重要な関係をもつものであることは当然である。

⑪ 歯

歯については専門家の鑑定を求めた。

V　古墳の特徴と年代

今回調査した2基の古墳のうちA墳はいわゆる箱式石棺で，千枚岩の自然石を箱形に並べて棺を造り，その上に同じような千枚岩の自然石を並べて蓋としているもので，この式の箱式石棺は，県北に数多く存在しており，東は延岡市から北方町を経て当地に至る五ケ瀬川の沿岸から耳川沿岸の東臼杵郡諸塚村松ノ平，西郷村尾佐渡などにも存在する。そして副室を有せず，棺底に底石を用いないものは古代と考えられる。ここのA棺には何らの遺物もなかったが，石棺わきの南東側で発見された弥生式土器の破片は重要な参考品であって，この石棺は弥生時代のものであることは疑う余地はあるまい。

またB墳の石棺は軟質の凝灰岩の切石を組立てて作ったもので，この式のものは延岡市に多く，嘗て故鳥居龍蔵博士が調査された南方古墳群中に多く，同博士はこれを「組合せ式石棺」と書いていられる。

しかし南方の例でも見られるごとく，古墳時代の組合せ式石棺は封土の中にあるもので，封土のない組合せ式石棺は弥生時代のものに多いと言われている（註１）が，われわれはここにその１例を見出したのである。前に述べたごとく，この石棺内で発見された５５個の平玉は，北諸県郡高崎町の栗巣遺跡で多くの弥生式土器とともに発見した平玉と同じものである。このように見て来れば，この組合せ式石棺が弥生時代のものであることは，もはや疑う余地はないものと考えられる。

問題は鉄環であるが，わが国では鉄器は弥生時代中期からあり，すでに宮崎市の石神遺跡（弥生中期）から鉈が発見されているから時期的には問題はないが，これが何に使用されたかが解れば，被葬者の生活が知られるのであるがはっきりしない。平たい鉄の輪に通されているリングのような２個の平たい鉄の輪は何であろうか。２個あるのを見るとこれは１種の遊環で，触れ合って音を発するものではなかろうか。また大きい環の直径7.5cmという円さは，腕に通る程度の大きさであるから，これを１種の腕輪と見ることができるのではあるまいか。今は銹びているが，鉄とはいっても，これを綺麗に磨けば立派な腕輪になると思われる。何れにしても棺の内側に朱を塗って葬られていることといい，５５個以上の装身用の平玉を有していることといい，この棺の被葬者が相当に身分の高い豪族であったことが知られるのである。

最後に，この調査に当って，石棺その他の実測は田ノ上哲（宮崎考古学会々員），田尻隆介（高千穂町教育委員会），坂本泰博（同　上）の各氏が担当し，図面，写真および遺物の実測は田ノ上哲が担当，本文は石川が執筆したが，発掘に当っては高千穂町教育委員会の方々や延岡市役所環境保全課係長甲斐常美氏ほか地元の有志諸志など多くの方々の協力を得た。併せて深く感謝の意を表する。（石川恒太郎）

（註１）　日本考古学協会編「日本考古学辞典」Ｐ１５６。

Ⅵ　石棺出土人骨の歯

河内丸山５２－Ｂ号の組合せ式石棺より出土したヒトの歯について観察する機会を与えられたので，その所見を報告したい。

資　　料

歯は，本報告書別項に記載されているように，石棺の東側から３４本，西側から７本が採集され，それぞれ別封の上著者の許に届けられてきた。これらのうち東側から出土した３４本の中で２本に数えられている割れた歯が接合できたので結局資料数は次のとおりである。

(1)　東側から採集された歯

永久歯　２３本（歯根まで完成）

〃　　４本（歯冠のみのもの）

乳　歯　　６本

(2)　西側から採集された歯

永久歯　　２本（歯根まで完成）

永久歯　　5本（歯冠のみのもの）

所見および小考

(1)　東側より採集された歯

33本の歯を分類すれば明かに異なる2群に大別されるが，これを歯式で示せば次のとおりである。

Ⅰ群
$$\frac{M_3M_2M_1P_2P_1C\ /\ /}{M_3M_2M_1P_2P_1/\ I_2I_1}\left|\frac{/\ /\ C\ P_1P_2/\ M_2/}{I_1\ I_2/\ P_1P_2M_1M_2/}\right.$$

Ⅱ群
$$\left|\frac{\begin{matrix}(C)\\ i_1\ i_2\ c\ m_1m_2\end{matrix}}{\begin{matrix}c\\ (C)\ (P_1)(P_2)\end{matrix}}\right.$$

／　欠如歯
（）　歯冠（埋伏歯）

Ⅰ　群

Ⅰ群の23本は歯根まで完成されたものであり，形は比較的大きい。咬耗度は比較的軽く，Ｂｒｏｃａの1度であるが，第3大臼歯のみはとくに弱い。カリエスは認められない。男性，壮年期（30才未満）のヒトの歯と推定されるものである。

Ⅱ　群

Ⅱ群の10本は乳歯6本と，永久歯の歯冠のみのもの4本である。乳歯はいずれもかなり磨耗がひどく軽度のカリエスも認められる。永久歯の歯冠部はほぼ完成に近いが，歯根は全く見られない。咬合面には全く磨耗の痕はなく，未萌出のものと考えられる。

従ってⅡ群の歯は，乳歯が未だ存在し，上，下顎骨中に埋伏中の永久歯歯冠部が残っていたものと考えられ，乳歯の磨耗度及び歯冠形成の状態からみて6～7才と推定できる。性別は不明である。

(2)　西側より採集された歯

西側より採集された7本はすべて永久歯であるが，これも次の異なる2群に大別できる。

Ⅰ群
$$\frac{\quad}{(M_1)}\left|\frac{(M_1)(M_2)}{(M_1)(M_1)(M_2)}\right.$$

Ⅱ群
$$\frac{I_1}{\quad}\left|\frac{I_1}{\quad}\right.$$

（）歯冠のみ（埋伏歯）

Ⅰ　群

Ⅰ群の5本はいずれも永久歯の歯冠のみで歯根は全く見られない。また咬合面に摩耗の痕も認め得ない。未萌出のもので形成途上の歯冠と考えて差し支えないであろう。年令的には第1大臼歯の歯冠は完成しており，第2大臼歯のそれはほぼ形成を終えようとしているので，年令的には6～7才と推定できる。性別は不明である。

Ⅱ　群

Ⅱ群の永久歯2本は歯根も形成され，形状はかなり大きく，咬合面には軽度の磨耗（Ｂｒｏ

ｃａ１度）が認められる。男性，壮年期の歯と推定できるものである。

(3) 小　考

石棺東側より採集された歯の主力（(1)－Ⅰ群）は男性，壮年期のヒトの歯と推定されるが，その他（(1)－Ⅱ群）６～７才のヒトの乳歯および永久歯の歯冠部が混在していた。Ⅱ群の乳歯と永久歯の歯冠は同一個体のものと考え得るので，東側より採集された歯は２個体分である。

次いで石棺西側より採集された歯の主力（(2)－Ⅰ群）は未萌出の永久歯の歯冠であり，その形成過程より推して６～７才のヒトの歯である。またこの他（(2)－Ⅱ群）に永久歯２本があり，すでに歯根も完成されており，男性，壮年期のヒトの歯と推定される。

以上のように石棺東側より２個体分の歯と，西側より２個体分の歯が採集されているが，これらを総合的に考えてみると，必ずしも合計４個体分の歯とは考えられない。歯の形状および歯種からは東側の成人の歯と西側のそれとは同一個体で，また西側の幼児の歯と東側のそれとは同一体であると考えても何等の矛盾を感じないようである。言うまでもなく，発掘作業はきわめて精密に行われたものであろうが，永い期間における石棺内への水分流入等により，２個体分の歯がある程度混在していたものと考えた方が理解しやすいように思われる。

要　　約

河内丸山５２Ｂの組合せ式石棺より出土したヒトの歯について精査した所見を要約すれば次のとおりである。

(1) 石棺東側より採集された歯は，男性，壮年期のヒトの歯を主力とし，これに６～７才の幼児の歯が混在していた。

(2) 西側より採集された歯の主力は６～７才の幼児の歯であり，これに男性，壮年期のヒトの歯が混っていた。

(3) 歯の形状および種類より綜合的に考えるとき，これらの歯は４個体分のものではなく，成人（男性，壮年期）と幼児（６～７才）の２個体の歯が石棺内において混在していたものと考えられる。

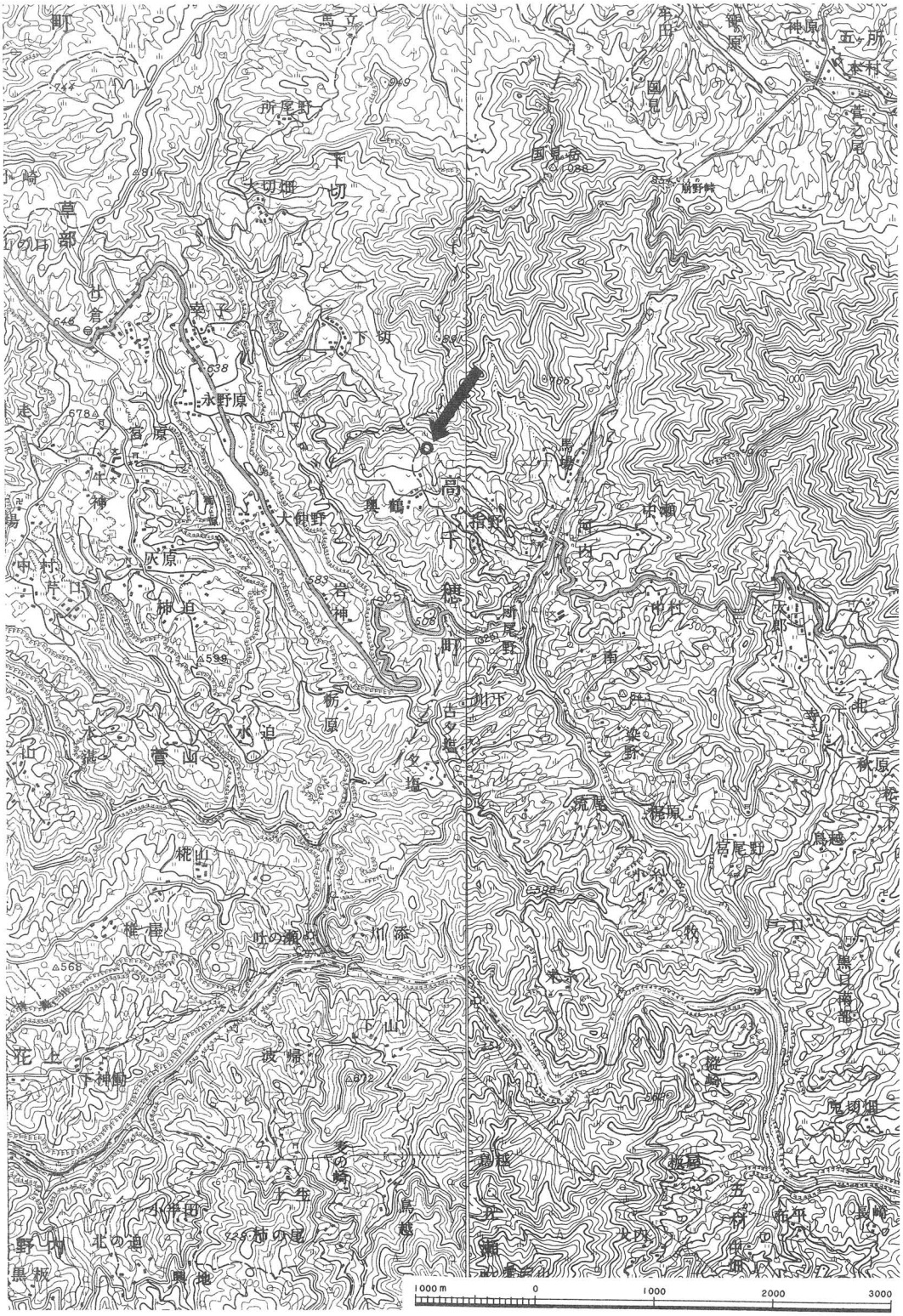
（内藤　芳篤）

参考文献

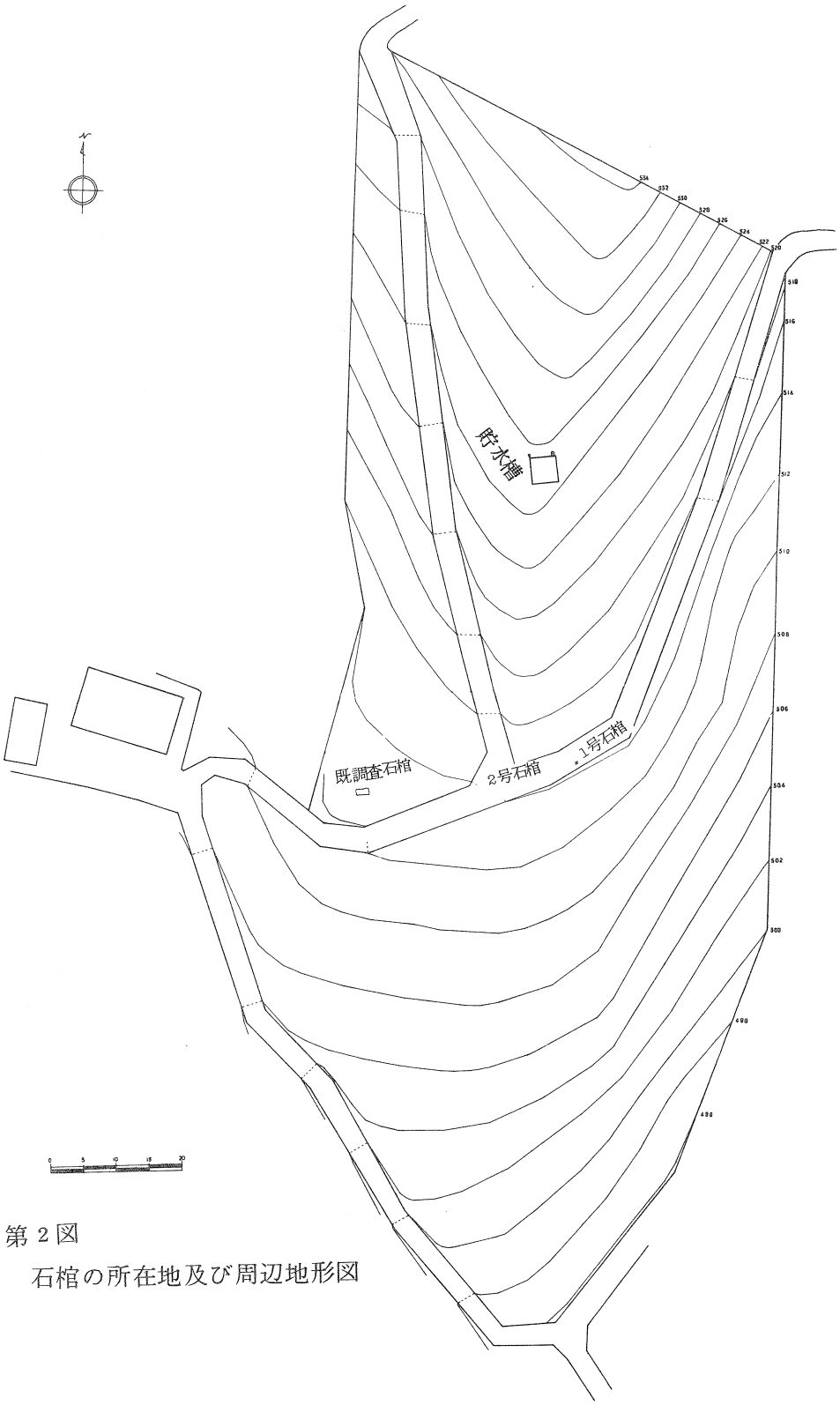
1）　藤田恒太郎　１９６２：歯の解剖学　金原出版，東京

2）　上条　雍彦　１９６２：日本人永久歯の解剖学　東京歯科大学，東京

3）　藤田恒太郎　１９６３：歯の話　岩波，東京

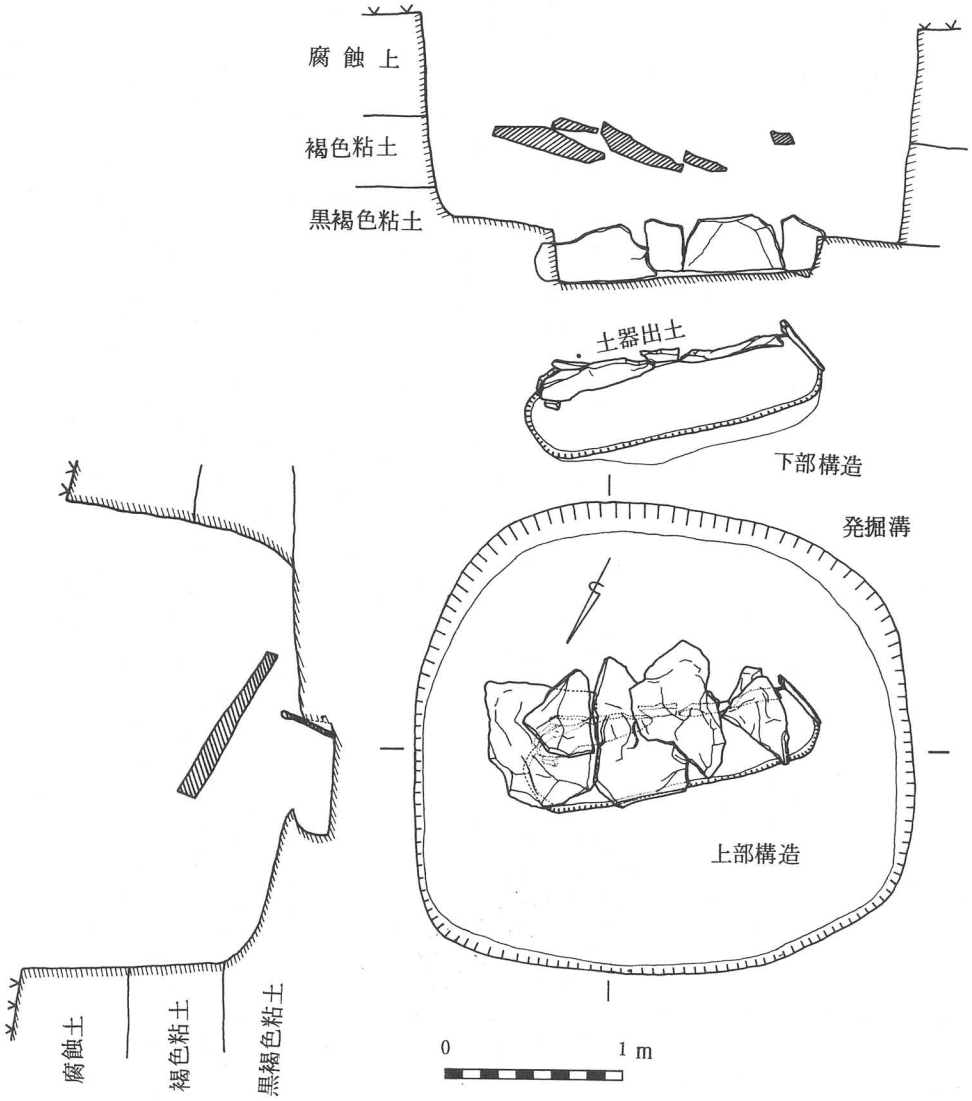


第１図　遺跡位置図（矢印）

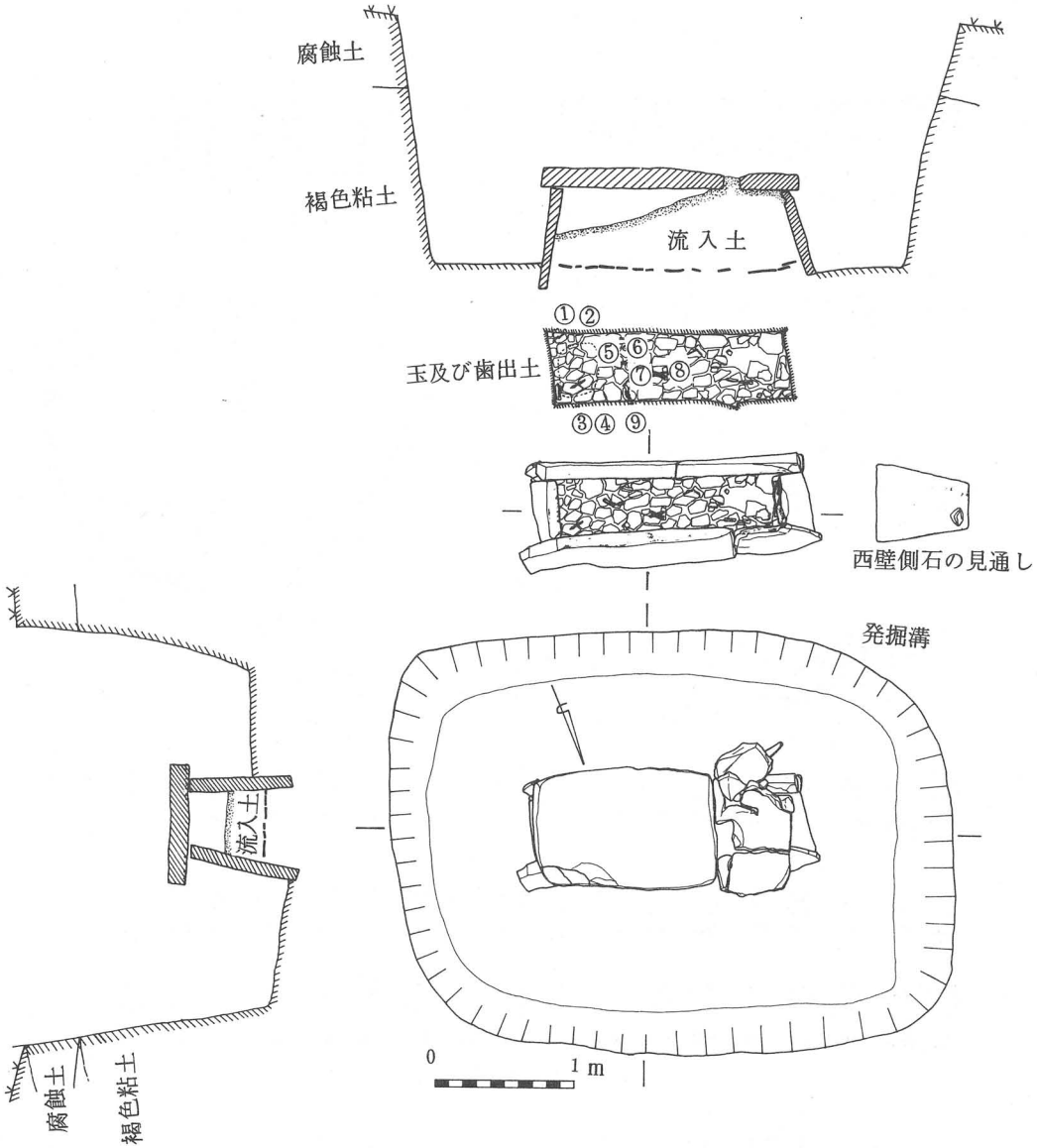


第２図

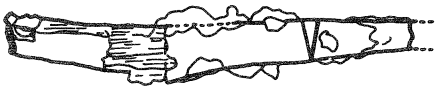
石棺の所在地及び周辺地形図



第３図　５２－Ａ号　箱式石棺実測図



第４図　５２－Ｂ号　組合せ式石棺実測図

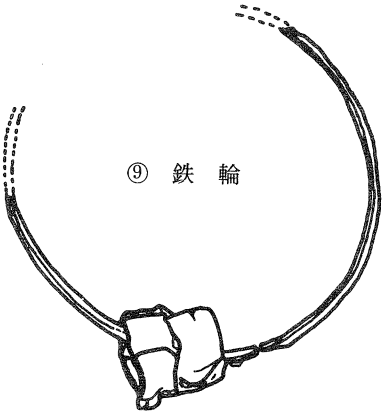


① 刀 子

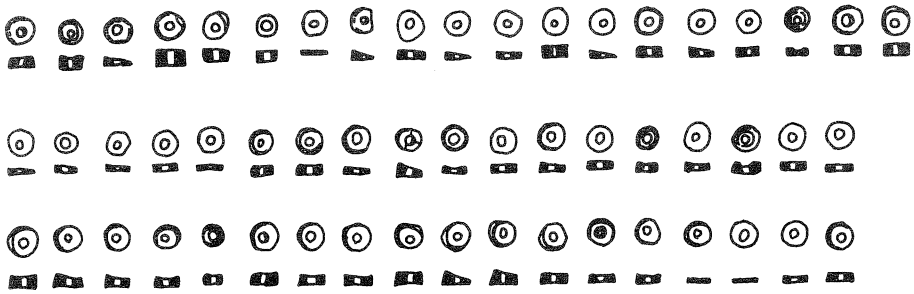
② 刀 子

③ 刀 子

④ 刀 子



⑨ 鉄 輪

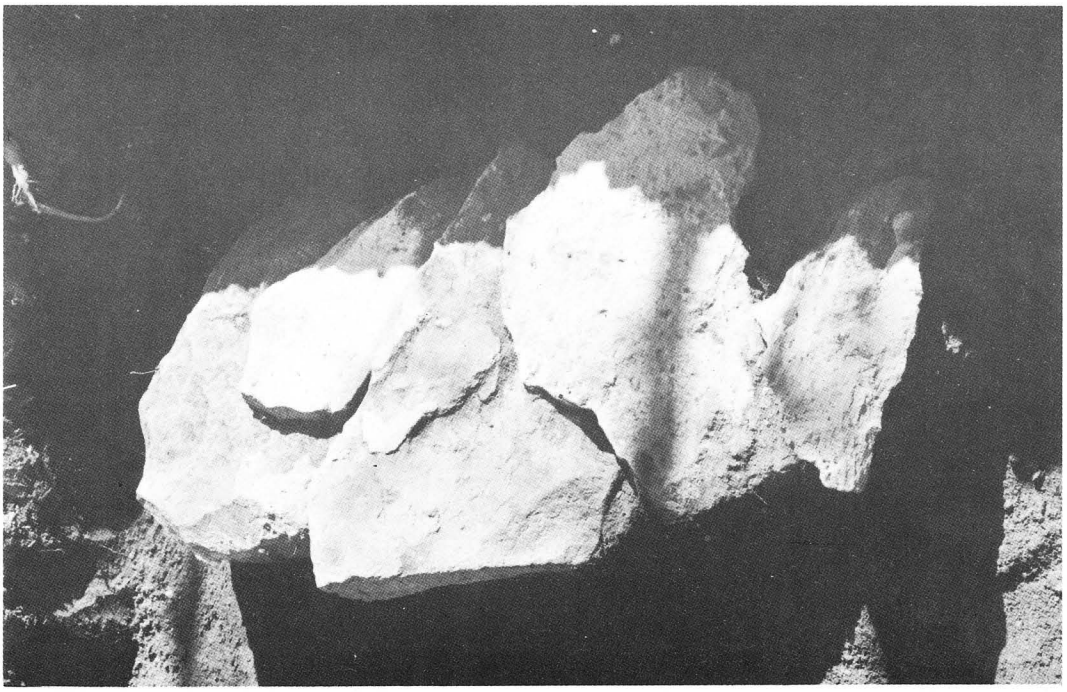


⑩ 平 玉

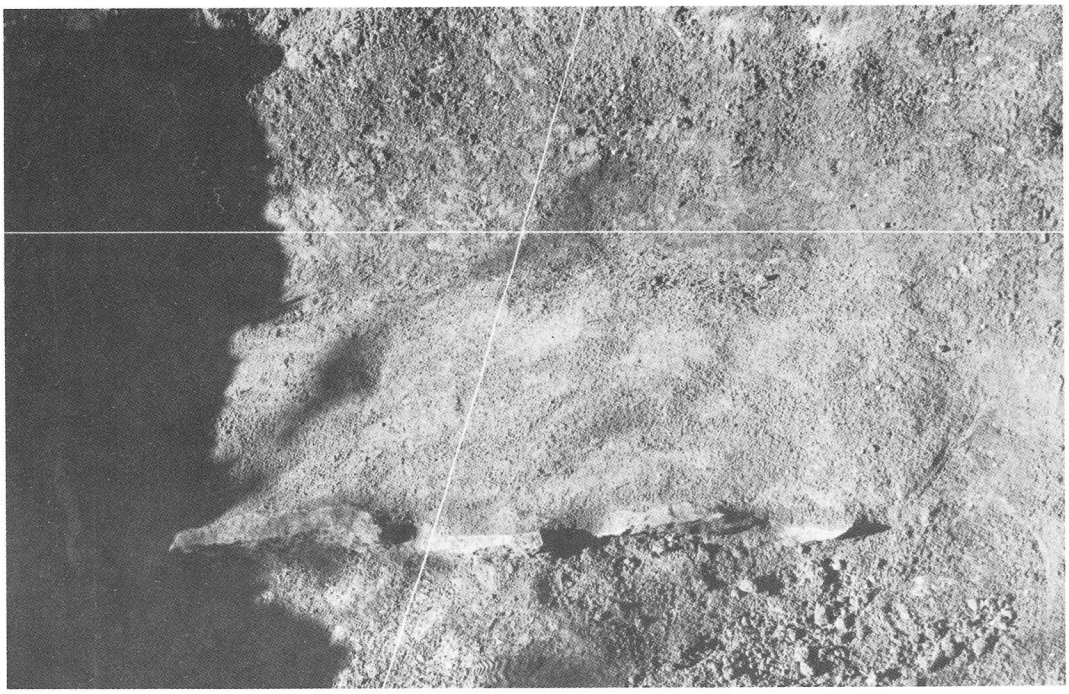
第５図　５２－Ｂ号　組合せ式石棺副葬品実測図

（⑤～⑧は人骨片である。）

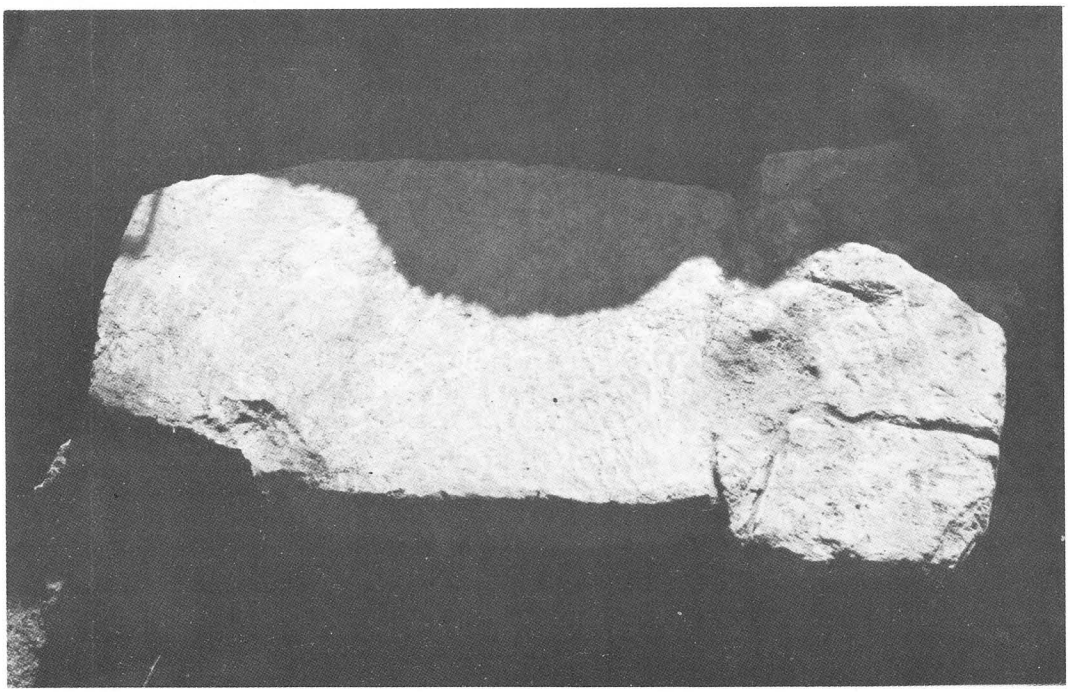
(1) 遺　跡　遠　景（矢印）



(2)　52－A号箱式石棺上部構造

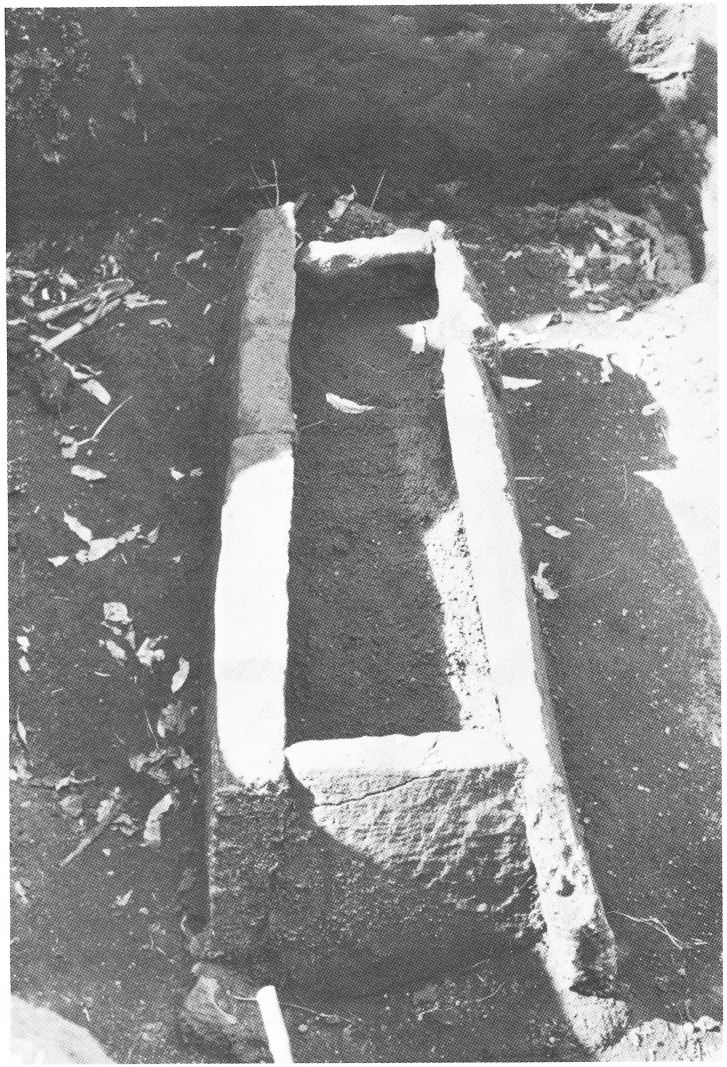


(1)　５２－Ａ号箱式石棺



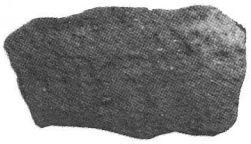
(2)　５２－Ｂ号組合せ式石棺蓋石

図版3

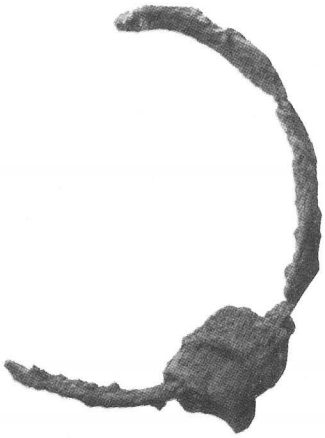


(1)　５２－Ｂ号組合せ式石棺

(2)　５２－Ｂ号組合せ式石棺（石棺東寄りから出土した歯）



(7)



(5)

(6)

(1)

(2)

(3)

(4)

副　葬　品

(1)	52－B号	No. 1	刀子	(4)	52－B号	No. 4	刀子
(2)	〃	No. 2	刀子	(5)	〃	No. 9	鉄輪
(3)	〃	No. 3	刀子	(6)	〃	No. 10	玉
				(7)	52－A号	石棺外出土弥生土器	

Ⅱ　赤木箱式石棺発掘調査

延岡市舞野町１４７７番地

県文化課主任主事　岩永　哲夫

本　文　目　次

Ⅰ　所　在　地 …… 39
Ⅱ　発見の動機と調査経過 …… 39
Ⅲ　調査の結果 …… 40
Ⅳ　ま　と　め …… 41

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地 …… 39
第2図　箱式石棺実測図 …… 41
第3図　箱式石棺蓋石実測図 …… 42
第4図　箱式石棺周辺出土土器片実測図 …… 42

図　版　目　次

図版1　(1)　箱式石棺所在地近景 …… 43
　　(2)　調査前の状態 …… 43
図版2　発掘風景 …… 44
図版3　箱式石棺全景 …… 44

Ⅰ　所在地（第１図）

延岡市舞野町１４７７番地（字赤木）

第１図　遺跡所在地（◎印）

Ⅱ　発見の動機と調査経過

昭和５２年９月３０日，延岡市農政課畜産係から，県文化財保護指導委員甲斐常美氏（同市市政相談室）に箱式石棺らしいものを発見した旨の連絡があった。説明では，土地所有者が国庫補助を受けて，山林を牧草地にするために，延岡市に申請をなし，その申請にもとずき，市で測量を実施していたところ，石棺が露出しているのを発見したということであった。甲斐氏によると，前土地所有者の話では，昭和５０年暮れから５１年春にかけて，杉の植林の際，くわの先がかかり発見したが，中には何もなかったということである。

調査は，昭和５２年１１月２５，２７日の２日間，調査員岩永哲夫，調査補助員北郷泰道で行なった。また，延岡市教育委員会社会教育課牧野義英主事，県文化財保護者指導委員甲斐常美氏にも協力していただいた。

現地付近は，昭和１８年９月８日史跡南方古墳群として国指定を受けた古墳群の一角で，字赤木には丙1.424の1（1畝8歩），丙1.480（15歩），丙1,481の1（26歩）の3筆が指定されている。

箱式石棺は，南に下る丘陵の斜面約１０度にあり，南には国鉄高千穂線，平行して国道２１８号線が走り，南方古墳群の点在する丘陵へと続き，五ヶ瀬川へ至る。

Ⅲ　調査の結果

調査の時点での箱式石棺は，図版1にみるように蓋石の1枚は取り除かれ，落葉等によりおおわれている状態であった。

層位を北面で観察すると

①	表　　土	２０cm
②	黒色土層	３５cm
③	赤ホヤ層	３７cm
④	漆黒土層	１６cm
⑤	褐色粘質土層	

となっており，石棺は第3層（赤ホヤ層）以下に構築されている。

石棺の主軸の方位はＮ７３°Ｅであり，大きさは上面（内法）で長さ１６８cm，幅３０cm，深さ50～６０cmをはかり，底部が広く，上部は狭くなっている。底石はなかった。構築は脇側石各2枚，上下側石各1枚の計6枚及び蓋石2枚からなっている。石材はすべて凝灰岩である。

築造過程を見ると，周囲の状況から，長さ２５０cm以上，幅８５cm以上にわたって堀り込み，側石を南側の壁に接して立てかけ，石材間を白粘土でかためながら構築していったものと考えられる。脇側石は上下側石の内側に組み立てられている。

蓋石は2枚であるが，1枚は石棺の脇に取り除かれており，長さ１２４cm，幅４７～５５cm，厚さ１０cmのもので，片方に縄掛突起が造り出されている（第3図）。

もう1枚は石棺の枠から外れ，片側が中に落ち込みかけ，斜めに傾いていた。その大きさは，長さ８３cm，幅５２cm，厚さ１１～１２cmで方形状をなしている。

脇側石は4枚よりなり，長さは小さいもので６７cm，大きいもので１００cmを測った。上下側石は，長さ５５～６５cmで，１０～１４cmの厚さをもっている。石棺内の埋土の内蓋石の落ちかけていた方はそのまま残っていたので，副葬品を検出すべく精査したが，何も発見することができなかった。

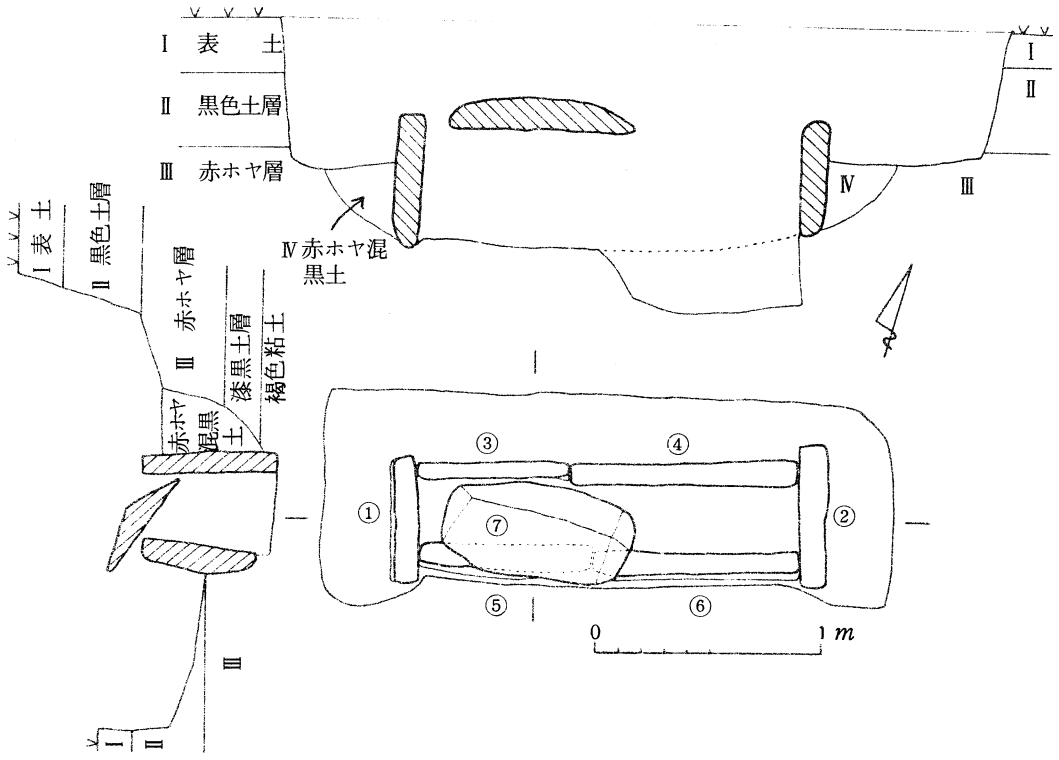
そのほか，調査地付近で採集した土師器片は第4図に示すとおりである。

Ⅳ まとめ

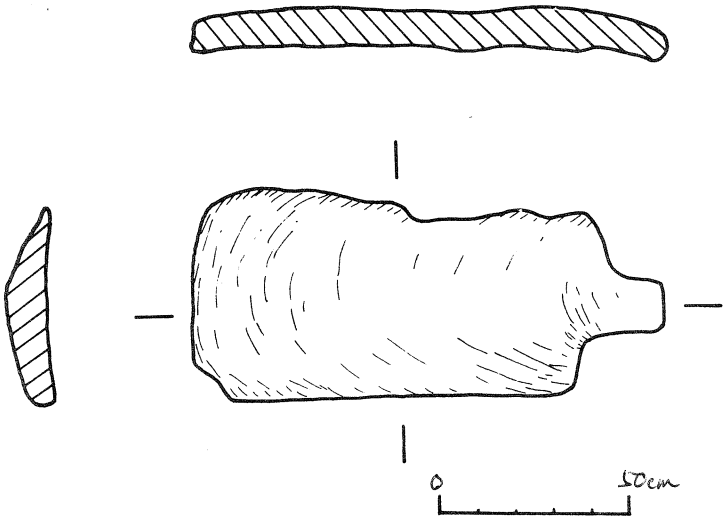
今回の箱式石棺の特徴は次のとおりである。

1. 史跡南方古墳群の広がりの中に存在し，混在の状態にあること。
2. 石材は地元に産する加工に適した凝灰岩を使用し，蓋の一部に縄掛突起の造り出しを有していること。
3. 副葬品については，調査前に既に取り去られた可能性もあるが，何も発見することができなかったこと。

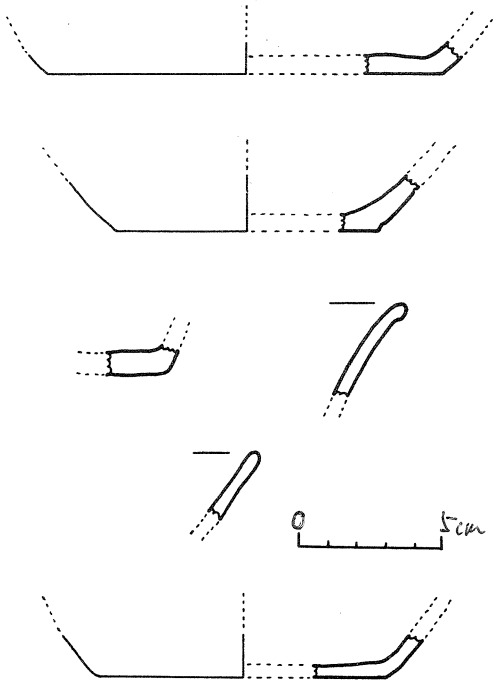
以上の3点をあげることができるが，検討する必要のあるのは，今後事例を増しつつ周辺の高塚墳との関係の把握である。



第2図　箱式石棺実測図

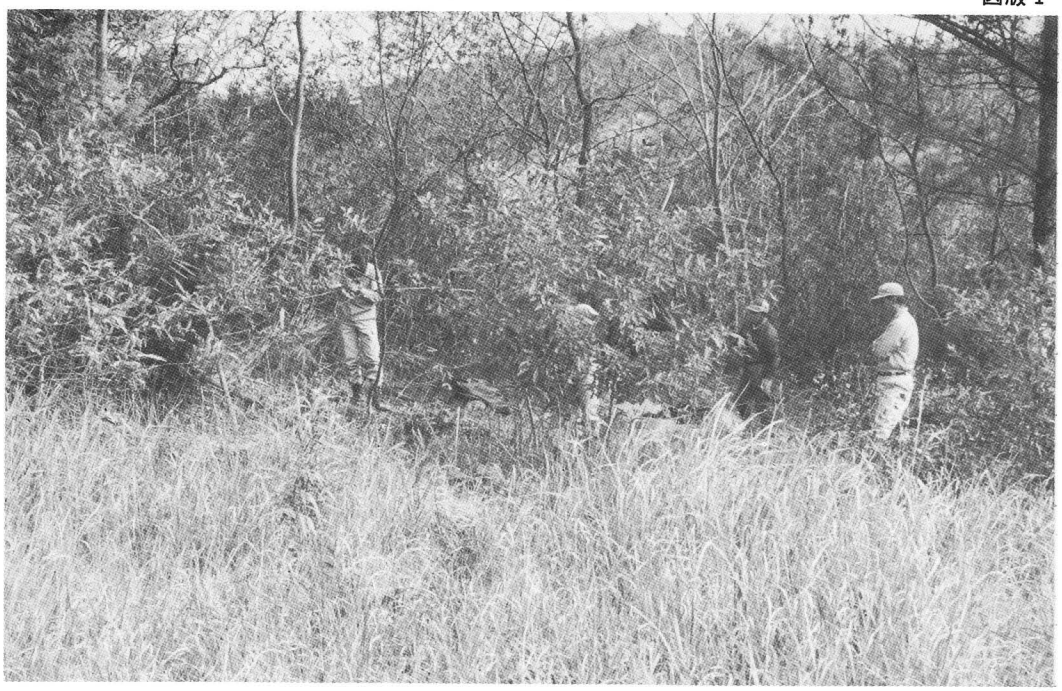


第３図　箱式石棺蓋石実測図



第４図　箱式石棺周辺出土土器片実測図

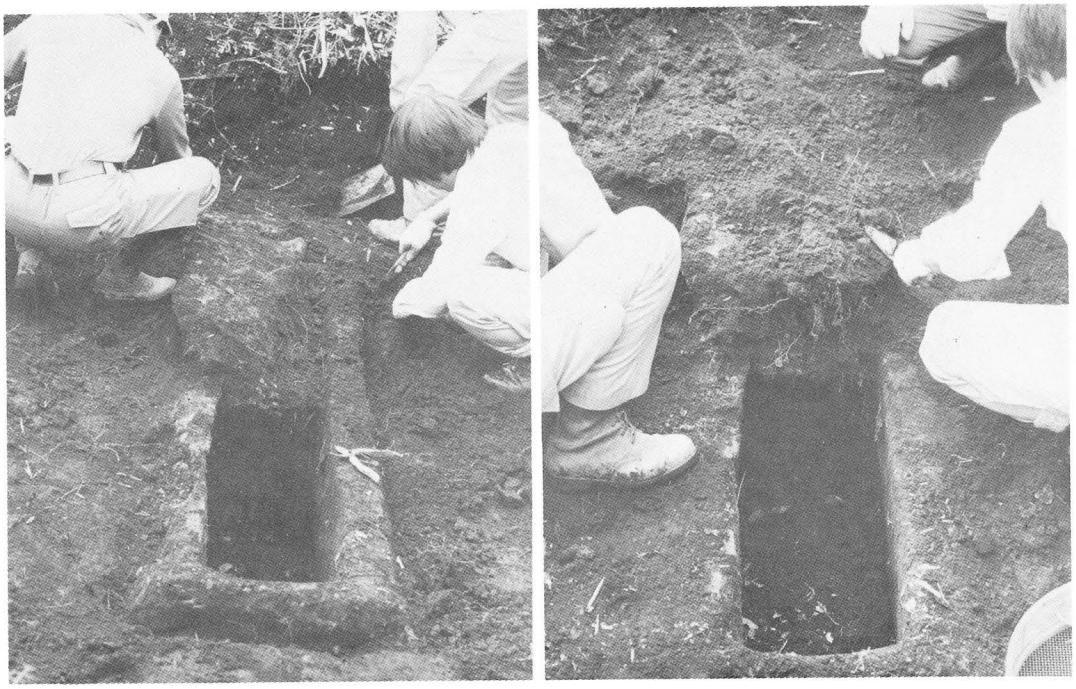
図版 1



(1)　箱式石棺所在地近景

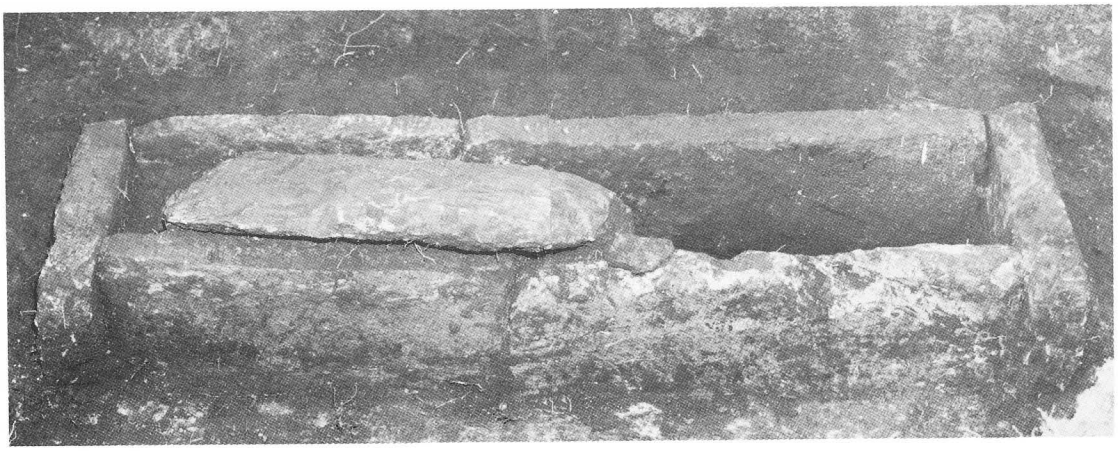
(2)　調 査 前 の 状 態

図版2



発　掘　風　景

図版3



箱式石棺全景

Ⅲ　鳥の巣箱式石棺発掘調査

東旧杵郡西郷村大字山三ケ１４６４番地

県文化課主任主事　岩永　哲夫

本　文　目　次

Ⅰ　所　在　地 …… 47
Ⅱ　発見の動機と調査経過 …… 47
Ⅲ　調査の結果 …… 48
Ⅳ　ま　と　め …… 49

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地 …… 47
第2図　箱式石棺周辺地形図 …… 49
第3図　箱式石棺実測図 …… 50
第4図　鉄鏃実測図 …… 50

図　版　目　次

図版1　(1)　発掘調査前の状況 …… 51
　　(2)　発掘風景 …… 51
図版2　箱式石棺の状況 …… 52
図版3　(1)　副葬品 …… 53
　　(2)　県指定西都古墳 …… 53

Ⅰ　所在地（第１図）

東旧杵郡西郷村大字山三ケ１４６４（鳥の巣）

遺跡は，通称・石櫃山，別名・辻と呼ばれる一帯で，北に耳川が流れ，諸塚村の山々を一望のもとに見わたす標高約４００ｍの高地に所在する。東方には，諸塚村立荒谷小学校を望むことができる。

第１図　遺跡所在地

Ⅱ　発見の動機と調査経過

昭和５２年１２月１６日，西郷村教育委員会において，県指定西郷古墳に通ずる道路を一部改良するため，ブルドーザーにより掘削作業中，道路の中央付近に箱式石棺を発見したものである。

この道路は，当初九州電力株式会社の送電線鉄塔工事用に開削されたもので，現在でも同鉄塔補修管理用道路として利用されている。土地は，鳥の巣地区共有地で，鍋島　久氏が代表をされている。

発見された箱式石棺は，側石，内部ともに損傷しないように蓋石とともに埋戻し，村教育委員会から県教育委員会へ調査依頼がなされた。

調査は，昭和５３年１月２５日，２６日の２日間にわたって，調査員岩永哲夫，調査補助員北郷泰道が行ない，次の方々（敬称略）に御協力をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

福吉勇雄　（西郷村教育委員会社会教育主事）
黒木　進　（宮崎県文化財保護指導委員）
奈須秀夫　（西郷村文化財保護委員）
橋本　仁　（　　〃　　）
その他，鳥の巣地区の方々

Ⅲ　調査の結果

石棺は，県指定西郷古墳の北東３０ｍの地点に位置し，主軸の方位はＮ３０°Ｅである（第２図）。

調査をする時点での石棺は埋戻しがしてあった。

削平された道の他の面は，表土から３層目と考えられる赤ホヤ層が露出していたが，石棺周辺のみは，黒色土が集中してみられ（図版１），石棺構築時の掘り込み状態が検出できるのではないかと期待したが，石棺の埋められているのは，純然とした赤ホヤ層のみで確認することができなかった。

石棺は剝離の容易な千枚岩の切石を使用し，土面（内法）で長さ１８２cm，幅３０cm，棺の深さ２０～３０cmをはかり，底部が広く，上部は狭くなっている。

石材の組み合わせを記すと，脇側石は各２枚，上下側石は各１枚の板石を使用し，脇側石の内，北寄り（頭部ではないか？）は，方形に近く，西側は１３０×４０cm，東側は１２５×５０cmの１枚石を棺底よりも２０cm程深く埋め込み，堅固にしているが，南寄りの各１枚は西側９２×２４cm，東側８５×２８cmの長三角形状で，棺底までとどく程度のものである。

上下側石は，それぞれ，上側石４０×２８cm，下側石３０×３５cmを脇側石の内側にはめ込み，外側に小板石を立てかけている。

蓋石は，発見された際に，中央部分が破壊されて両側のみが残っていた。

なお，板石間を埋める粘土等は検出できなかった。

また，注意をひいたものの一つに，石棺の脇に２枚の板石を突き刺したように立てて埋めていることがある。自然の状態ではなく，明らかに意図的なものと考えられるが，果していかなる意味を持つものか不明である。

石棺内は流入によると思われる土が堆積していたが，注意深く掘り出した結果，鉄鏃２本を発見することができた。底石はなかった。

副葬品

(1)　鉄　鏃〔第４図(1)〕

現長１１cm，最広部　1,2　cmの篦被腸抉柳葉式

(2)　鉄　鏃〔第４図(2)〕

篦被のみ現長　4,5 cm，おそらく(1)と同類のものであろう。

Ⅳ まとめ

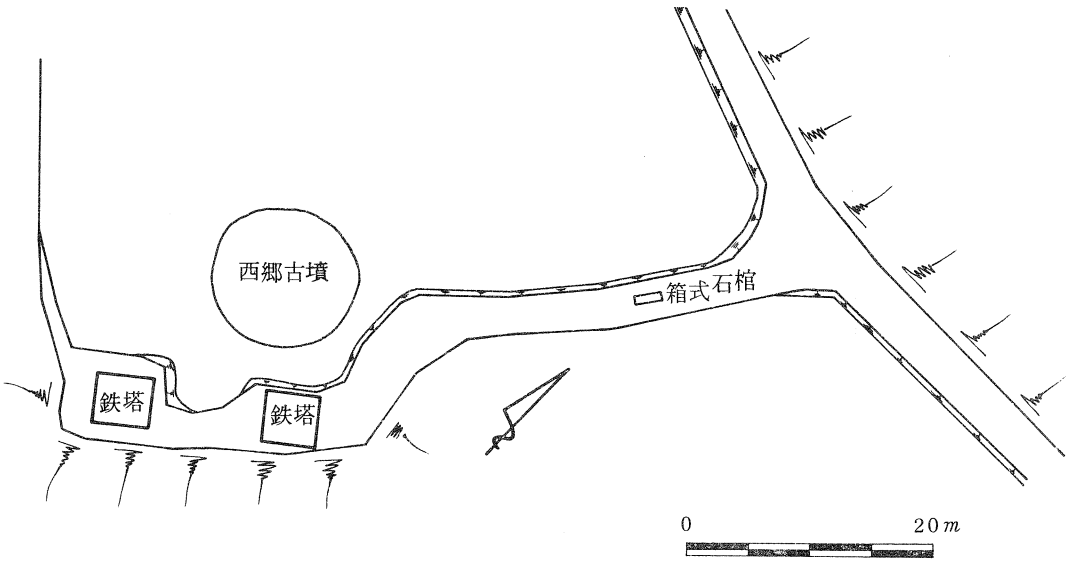
県指定西郷古墳は，昭和１０年７月２日県指定にされた円墳である。墳頂には石柱が建っており,「昭和４年１０月１日発掘調査，調査者宮崎県書記河井田政吉」と記され，西郷村教育委員会による説明板には，昭和４年の発掘調査の際に，直刀や鉄鏃，鉄剣等が出土したと記されている。

今回の箱式石棺は，円墳からわずか３０ｍの距離にあり，ともに石櫃山の尾根に築造されたもので，付近一帯は円墳を中心にした古墳時代の一墓域とみられ，周囲の雑木林の中にも数基の箱式石棺が眠っているものと考えられる。

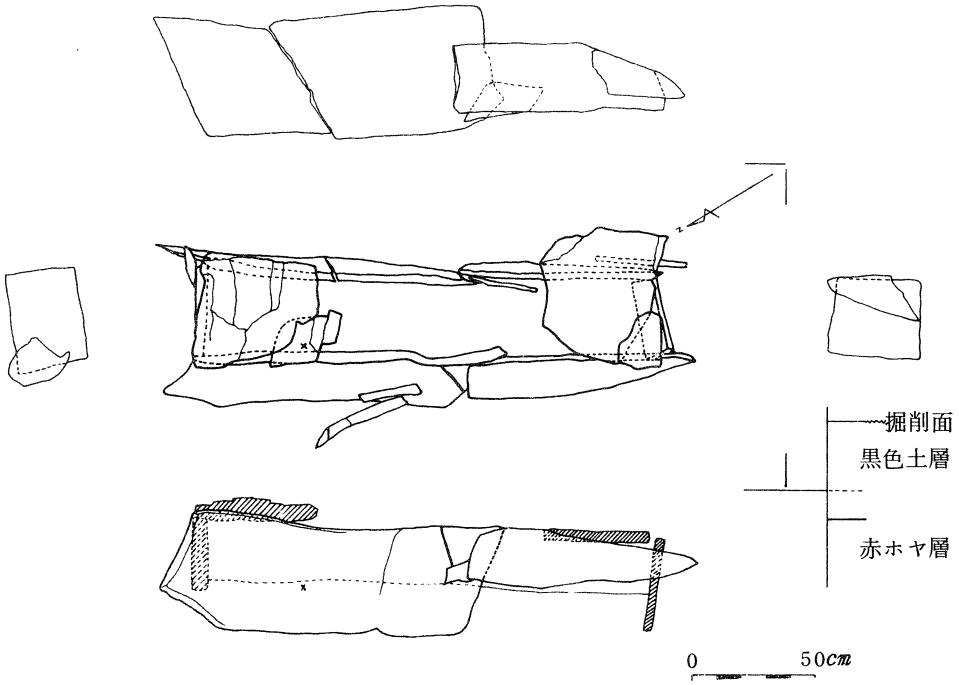
西郷村には，鳥の巣のほかに大字山三ケ尾佐渡，大字田代原良，大字田代若宮からも箱式石棺が発見されたということである(1)。

注

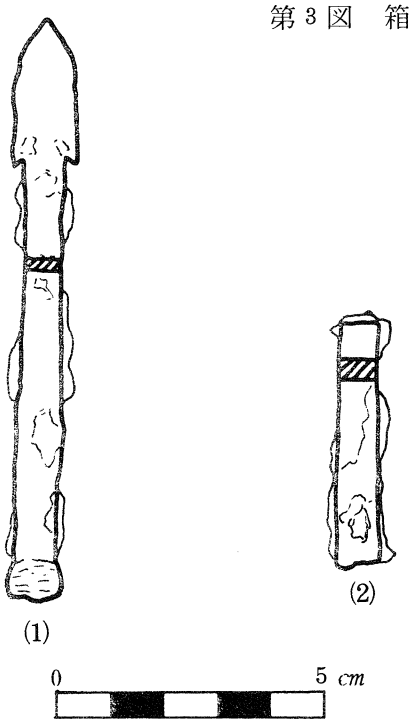
(1)　西郷村黒木　進氏の教示による。



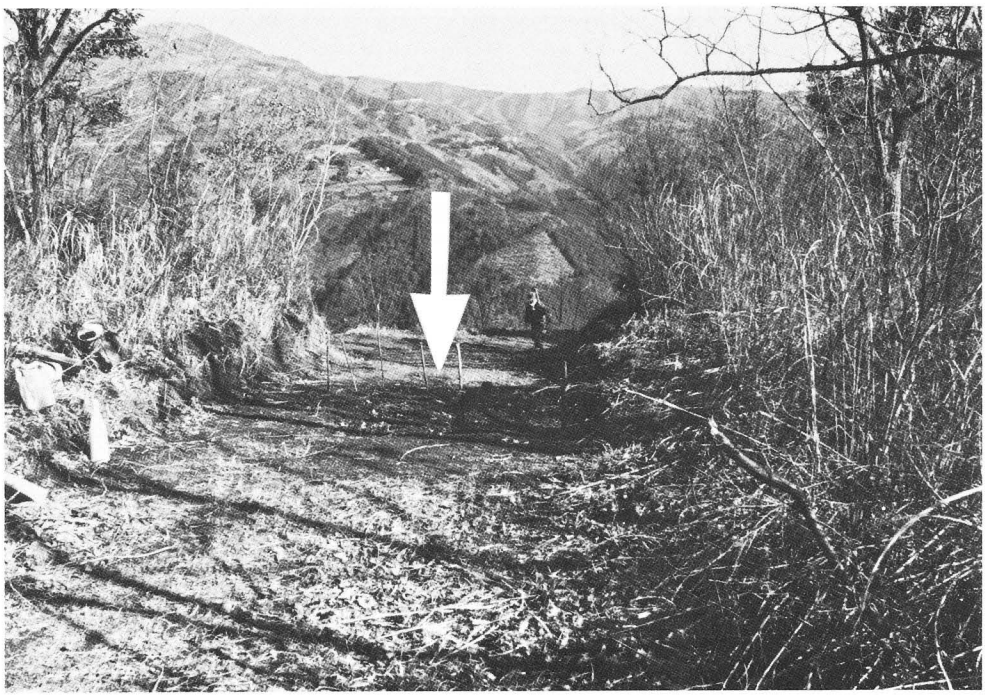
第２図　箱式石棺周辺地形図



第３図　箱式石棺実測図（×印鉄鏃出土地点）

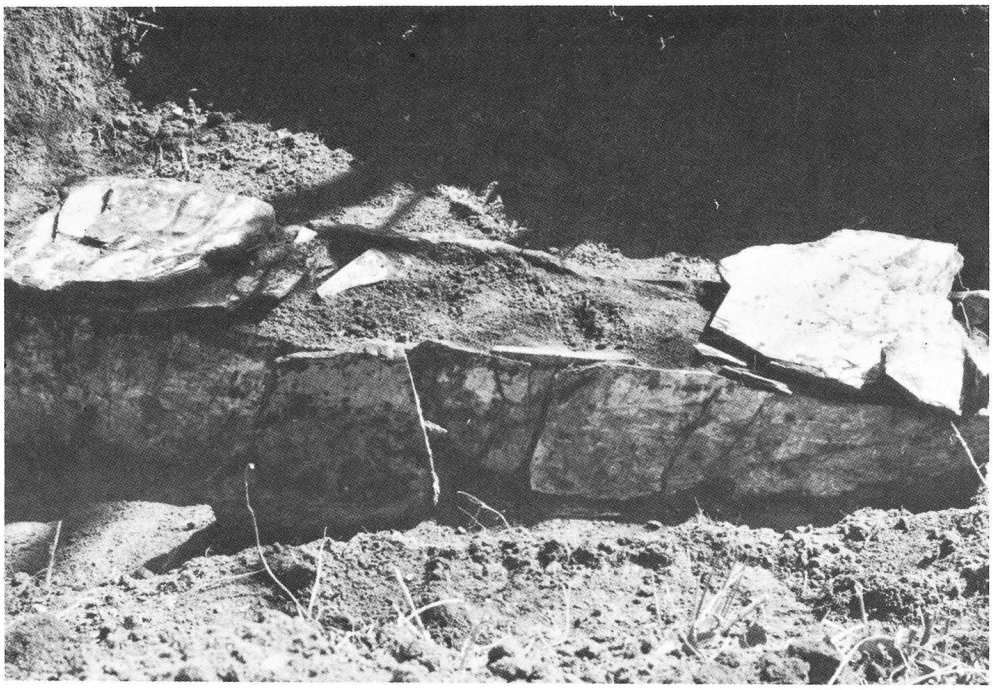


第４図　鉄鏃実測図

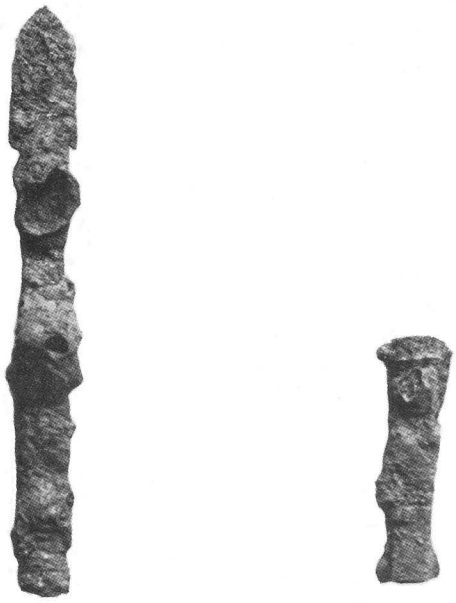


(1)　発掘調査前の状況　（矢印）

(2)　発 掘 風 景



箱式石棺の状況



(1)　副　葬　品

(2)　県指定　西郷古墳

Ⅳ　祝子園地下式古墳発掘調査

東諸県郡国富町大字本庄２０９８の１番地

県埋蔵文化財調査員　田ノ上　哲

県文化課主任主事　岩永　哲夫

本　文　目　次

Ⅰ　所 在 地 …… 57
Ⅱ　発見の動機と調査経過 …… 57
Ⅲ　地下式古墳の構造 …… 58
Ⅳ　副 葬 品 …… 58
Ⅴ　ま と め …… 59

挿　図　目　次

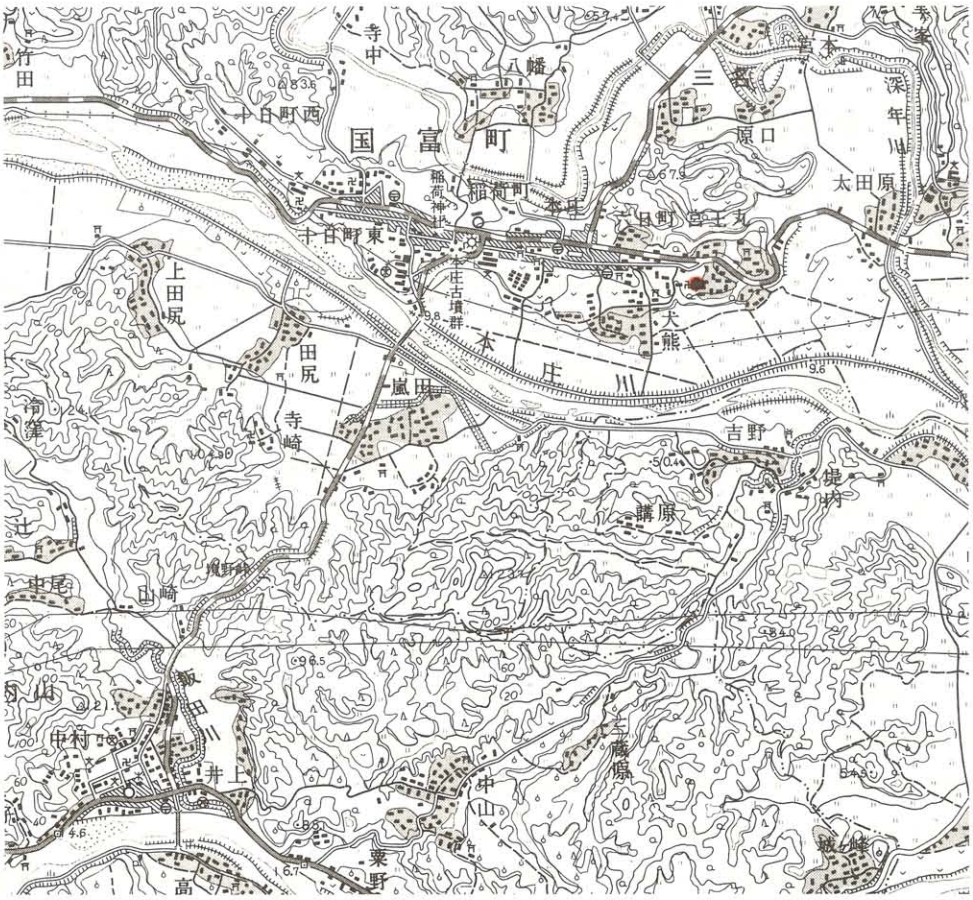
第1図　遺跡所在地 …… 57
第2図　遺構周辺図 …… 60
第3図　地下式古墳実測図 …… 61
第4図　副葬品実測図 …… 62

図　版　目　次

図版1　遺跡状況 …… 63
図版2　副 葬 品 …… 64

Ⅰ 所 在 地

東諸県郡国富町大字本庄 2,098の1番地（字祝子園）



第1図　遺跡所在地（◎印）

Ⅱ 発見の動機と調査経過

昭和５２年１２月２９日，真瀬田明人氏の宅地内で発見されたもので，家の改築の際，根石を宅地の片隅に置いたものが落下し，玄室天井部を破壊したものである。

調査は，昭和５３年２月１日から２日にかけて実施し，岩永哲夫，田ノ上哲が担当した。

また，国富町教育委員会社会教育課，与倉武徳係長ほか職員の協力も得た。

遺跡の所在地は，第１図に示すとおり大字本庄の中でも通称犬熊と呼ばれる地区であり，小字祝子園の中にはいる。東側２００m程の所に小径が南北に通っており，その東は宮王丸という地区であるが，

道に沿って二基の高塚墳が存在している。すなわち今回の地下式古墳の約２００ｍ南東に本庄古墳第５号，それから約５０ｍ北に同第４号古墳がある。

この台地は古墳地帯と言ってもよい程の所で，本庄古墳群がこの地帯にあるほか，地下式古墳も過去２２基この台地上で発見されている。それ以外に土地の人の話では，ここ犬熊近辺で地下式古墳らしい陥没が何度もあったという。

Ⅲ　地下式古墳の構造

この古墳は第３図で示すように，ほぼ南北に方位し，玄室を北に竪抗を南にして構築されていた。玄室は東西に長く，羨道とおおむね直角の関係に造り出されており，ほぼ長方形を呈している。

東西の長さは２４５cm，南北２１０cmであるが，東壁と西壁は中央付近で内側にカーブしながらせり出しており，直線にはなっていない。また羨道は平入りの形に付帯しているが，若干西寄りに付いており，東壁から玄門まで８０cmあるのに比べて，西壁から玄門までは５０cmにすぎない。従って玄門の幅は９５cm程度である。

玄室の壁は四方ともに内傾しており，床面から４０～６０cmほど上部でさらに内側に傾いて天井を形成している。この壁と天井との境界は刻線でもって画しており，特に西壁でその痕跡が明瞭であった。

天井のプランはいわゆる寄棟の家型と思われるが，陥没，剝離がひどく詳細は明らかでない。玄室床面には，羨道近くを除いて，ほぼ全面的に大小の礫が敷きつめられていた。そして羨道近くの西寄りの床面に提瓶が置かれていたが，天井陥没の際に押しつぶされていた。また，そのすぐ西に大小２本の刀子さらに西壁に近いところ鉄鏃１本があった。提瓶の北方１ｍ位の所に須恵器の蓋が置かれていたが，これも天井陥没の衝激で二つに割れていた。なお，中央付近の敷石の間に鉄鏃１本が落ち込んでいた。

層位は，地表下１７cmまで腐蝕土層，それから１８cmの厚さで赤ホヤ層，さらに暗褐色粘土層が１１０cmの厚さで続き，その下は砂層になっていた。

古墳はこの砂層に礫を敷いて床面とし，暗褐色粘土層を壁及び天井にして営まれていたが，床面から天井までの高さはわからない。地表から床面までは１６０cmほどで礫の上面より１０cm下が自然の砂層になっている。

羨道は土砂落盤の危険のため，玄門近くしか確認できなかったのでよくわからないが玄室より床面が少し下っているように見受けられた。なお，竪坑部はその位置と思われる地点に花壇が設けられているために，発掘不可能であった。それで竪坑の形状や閉塞の方法等は一切不明であった。

Ⅳ　副　葬　品（第４図１～６）

この古墳の副葬品は前述したとおり，須恵器短頸壺１，須恵器蓋１，刀子２，鉄鏃２であった。

(1)　須恵器の短頸壺である。最大円周は胴部上方にあり，２２.２cmである。口縁経は，１２.２cmである

が，頸の長さは3.9cmしかない。高さは22.9cmで，底は丸底を呈している。胴下部には，一面に不規則なタタキ目が残存しており，その内部にはあて板の痕跡（青海波紋）が残っている。器面は灰黒色を呈し，全面に粗い櫛目調整が施されており，内部土器にも櫛目による調整がみられる。

(2) 須恵器の蓋である。径14.1cm，高さは4.5cmある。天井部付近には巻き上げの痕跡が明瞭に残っている。器面は灰黒色で，粗い櫛目調整を行なっている。大きさからみて，短頸壺とセットをなすものと思われる。

(3) この刀子は玄門近くにあったもので，短頸壺と隣りあっていた。全長14.8cm，身長9.5cm，最大身幅1.8cm，厚味0.4cmを計る。柄部には木質が残存している。

(4) これは刀子(3)の下にあったものである。全長8.3cm，身長3.6cm，身幅1.0cmで，さびがひどく厚味の計測はできなかった。柄部には木質が残存している。

(5) 西壁付近にあったもので，現長7.8cm，最大幅2.8cmの方頭広根斧箭式であるが，さびがひどく厚味などは不明である。

(6) これも方頭広根斧箭式で，現長7.7cm，頭部幅3.3cmを計る。玄室中央部付近の敷石の間に落ち込んでいたもので，正確な位置は不明である。

以上，6点の副葬品のうち，須恵器は第Ⅲ期に相当するものである。また，鉄鏃は方頭広根斧箭式で後期に属するものといわれている。これらのことから，副葬品からみた年代は，古墳時代後期ということができよう。

Ⅴ まとめ

以上，国富町大字本庄祝子園で発見された地下式古墳について述べてきたが，その特徴などについて記すことにする。

(1) 構造

平入り・礫床・寄棟家形・竪坑及び羨道，閉塞は不明

(2) 遺物

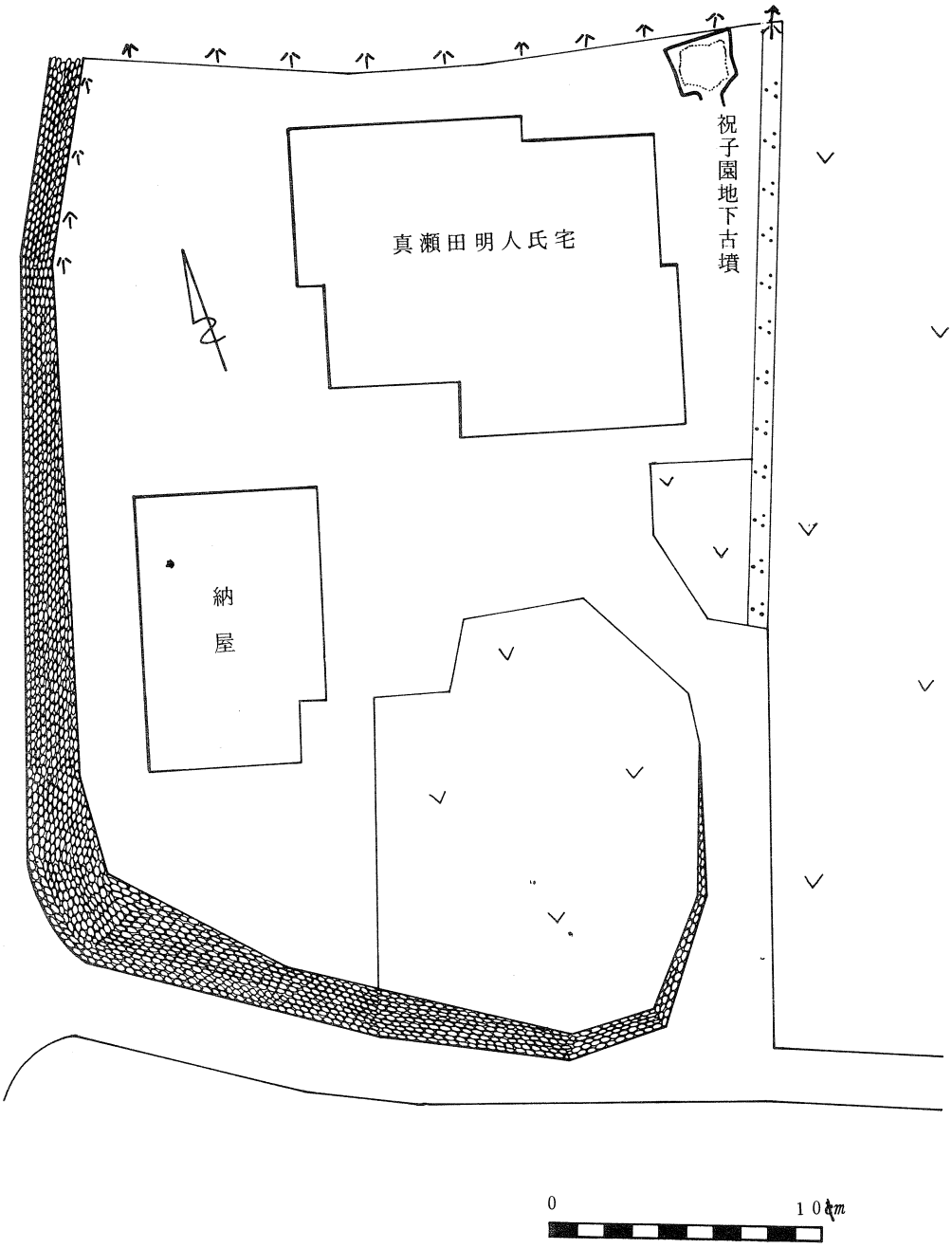
須恵器（短頸壺，蓋）・刀子2・方頭広根斧箭式鉄鏃2

構造をみると平入りになっている。これは地下式古墳の中では，もっとも普通の形である。古いといわれている古墳は，妻入り有屍床で，礫を敷きつめ，副葬品も高塚墳に劣らず豊富なのが通例である。

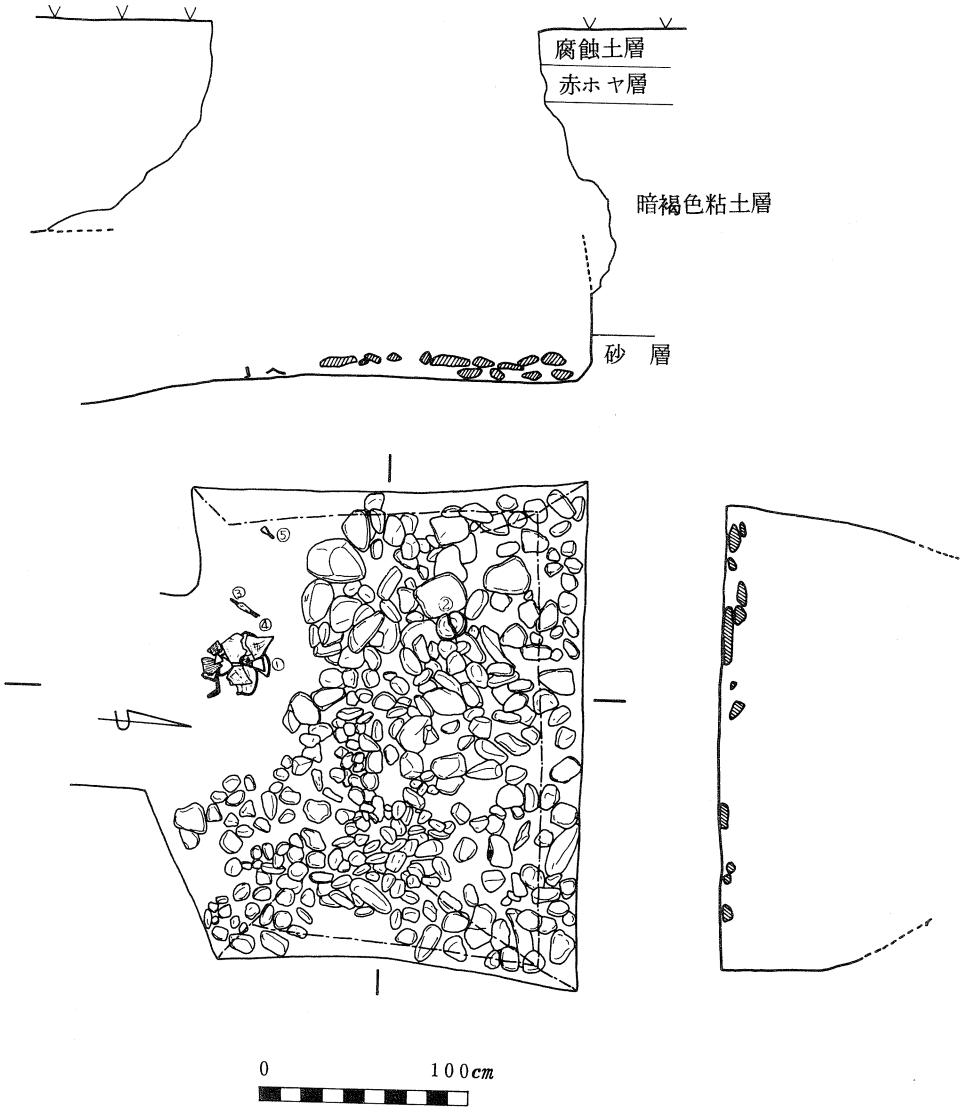
この古墳の場合，平入りではあるが礫床が存在し，わずかに古い形式も残している。また，寄棟の天井を持つことも同様のことがいえる。

従って構造上からいえば，地下式古墳の中では中間形態のものということができる。そして，副葬品の年代を考えあわせると，古墳時代後期，7世紀ごろの所産とするのが妥当である。

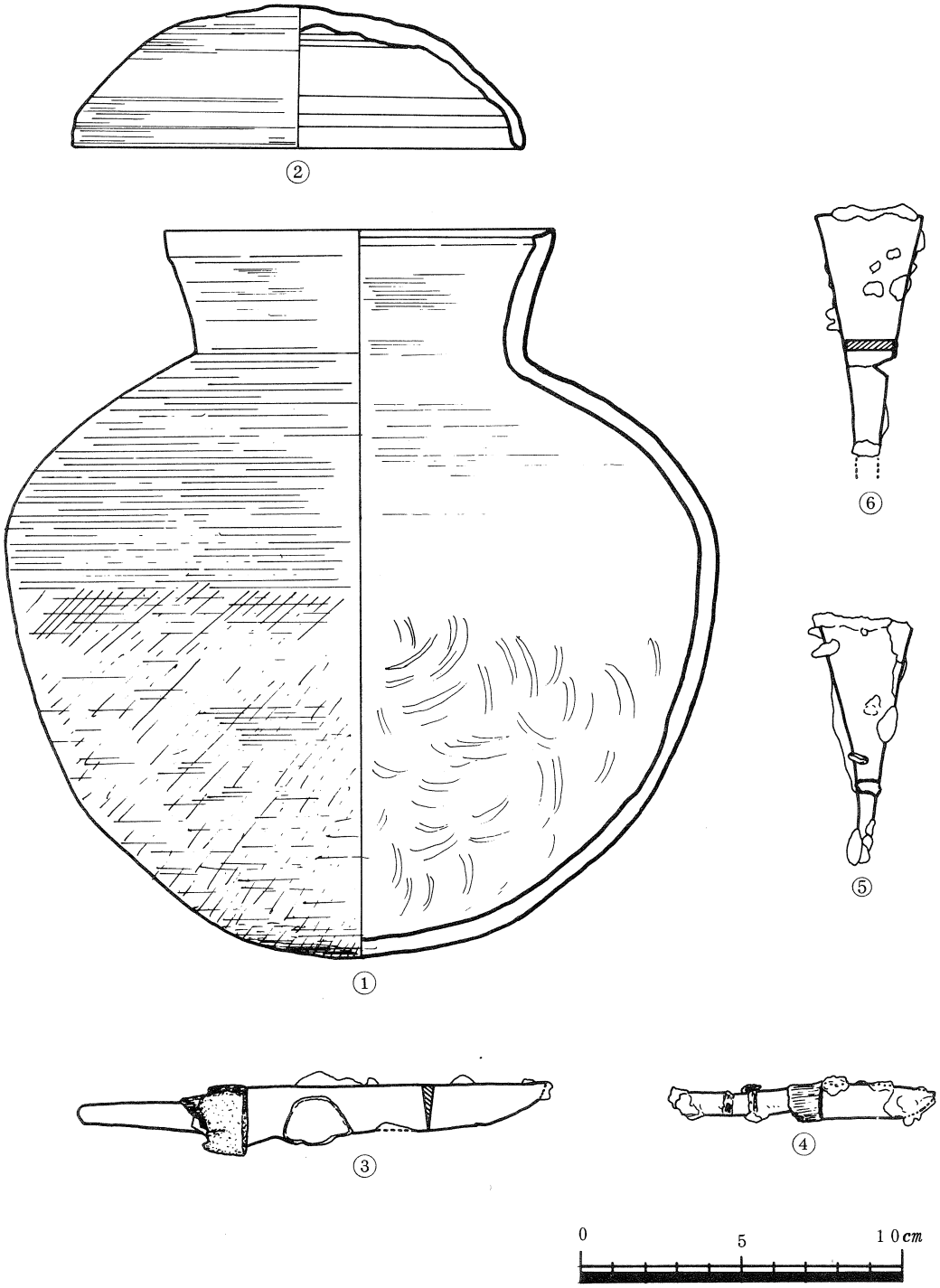
（田ノ上　哲）



第2図　遺構周辺図



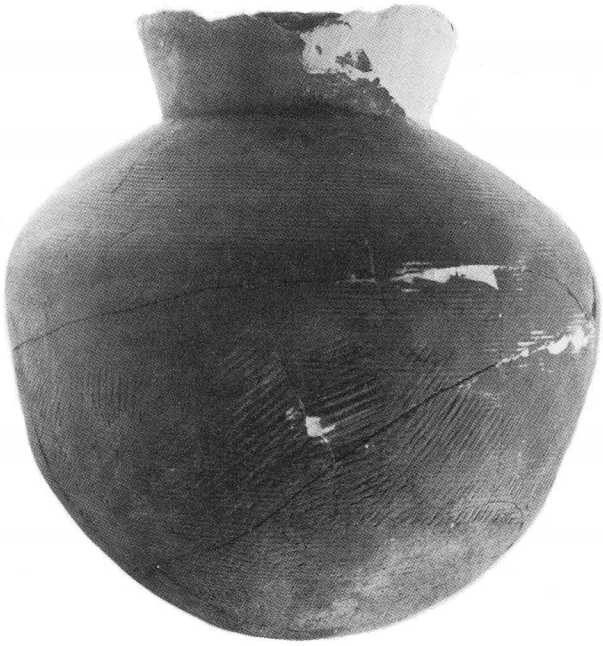
第3図　地下式古墳実測図



第4図　副葬品実測図

遺　跡　状　況

図版２



(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

V　築池地下式古墳発掘調査

都城市下水流町築池２５７６の３番地

県埋蔵文化財調査員　北郷　泰道

県文化課主任主事　岩永　哲夫

本　文　目　次

Ⅰ　所　在　地 …… 67
Ⅱ　発見の契機と調査に至る経過 …… 67
Ⅲ　調査の結果 …… 68
Ⅳ　ま　と　め …… 69

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地 …… 67
第2図　地下式古墳周辺地形図 …… 70
第3図　地下式古墳及び副葬品出土状態図 …… 71
第4図　副葬品実測図 …… 72

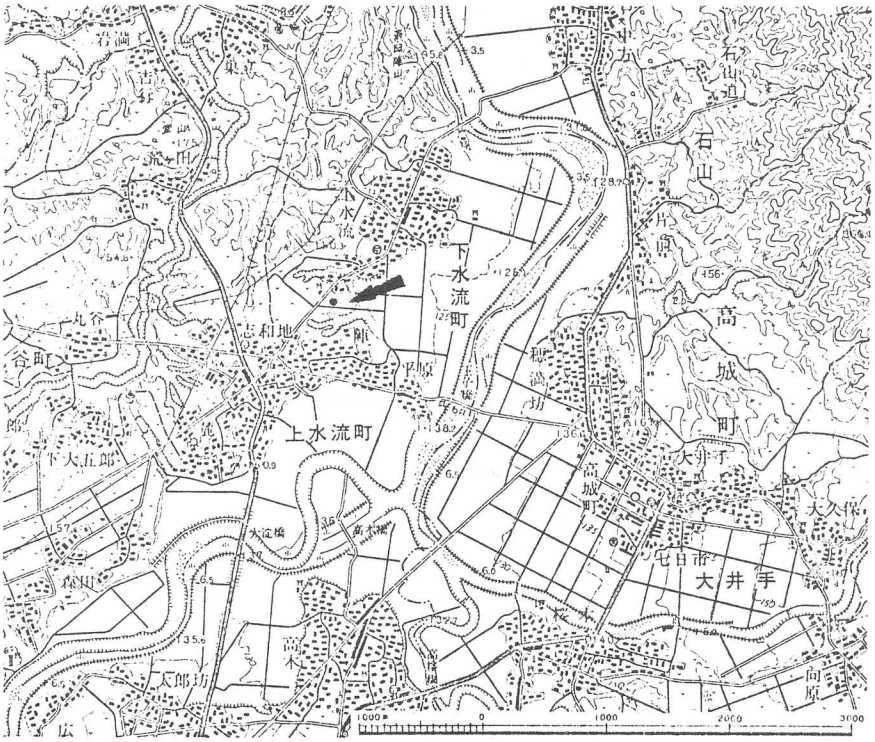
図　版　目　次

図版1　(1)　早馬塚古墳をのぞむ …… 73
　　(2)　陥没個所 …… 73
図版2　(1)　発掘作業風景 …… 74
　　(2)　人骨及び副葬品出土状態 …… 74
図版3　副　葬　品 …… 75

Ⅰ　所　在　地　（第１図）

本地下式古墳の所在する築池地区は，地下式古墳の群集するところと思われ，昭和４８年３月２８日日高正晴氏[1]によって，昭和５２年４月３０日岩永哲夫・田ノ上哲氏[2]によってなど調査された例がある。

本地下式古墳は，下水流町築池２５７６－３の高瀬正孝氏（同下水流町３０５４）の所有になる畑地に所在し，早馬塚古墳の南東約１５０ｍである（第２図）。



第１図　　遺跡所在地

Ⅱ　発見の契機と調査に至る経過

昭和５３年４月６日，畑地の所有者高瀬氏がゴボウを植えるため耕耘機によっての深掘り作業中，３地点にわたって陥没が生じ，同氏の報告により地下式古墳が３基確認された。今回の調査は，内１基について調査をすることになり，昭和５３年５月３０日，３１日の両日にかけ，県教育庁文化課岩永哲夫氏と筆者が担当した。

Ⅲ　調査の結果

本地下式古墳の耕耘機によって陥没した箇所は，玄室天井部であり，発掘は天井部を開口して行なった。

主体部はボラ層内に構築され，過去の例がそうであるように壁面などのボラの崩壊によって，原形を復元することはきわめて困難である。玄室の構造は，片袖になるであろうことは比較的確実に認められたが，玄室の四周は崩壊し，不整形となっており，確証はできないが，過去の例，壁面の残存からみて妻入り型寄棟造りとみてもよかろうと思う。

竪坑部分までの発掘は出来なかったが，玄室の長軸はほぼ東西の方向を示し，人骨は玄室の北半分に片寄って，東（羨道側）を頭にし仰臥伸展で埋葬されていた。

玄室の規模は現状で，長軸２９２cm・短軸１８６cmで，天井の高さは計測不可能であった。

副葬品は直刀・剣・鉄鏃の３種である。平根鏃１本が鋒を東に向け人骨の頭部付近に，直刀・剣が鋒を西（人骨の足の方向）に向け，左脇に添えられ，細根鏃１０数本は足許の左側にひとまとまりに副葬された状態で発見された。（第３図）

（1）　剣　（第4図1）

完形で全長７４.１cm，柄長１６.３cmを計る。身幅は関寄りで３.９cm，中程で３.１cmとやや切先にかけ細くなる。剣の厚さは０.６cmで鎬は通っていない。

柄元装具は発見された時，見当たらなかったが，剝離したと思える跡が鞘部に見える。鞘の断面における厚さは０.５cmである。

柄部には細い糸巻きのあとが残っており，鞘はほぼ２cm幅の樹皮状のものでまかれている。

（2）　直　刀　（第４図２）

同じく完形で全長６５.６cm，柄長１２.５cmを計る。身幅は中程で２.９cmで，棟幅は０.７cmである。

剣と同じく柄部には細い糸巻きがあり，鞘は０.７cm前後の平織りの繊維によってまかれている。

（3）　鉄　鏃　（第４図３～１０）

鉄鏃は全体で１１本以上が認められるが，いわゆる平根鏃は１本，残りは皆同型の細根鏃でひとまとまりに副葬されていた。これらにはストロー状のものを織った残片が付着しており，莫莚状ないしは簾状のもので作った入物（胡籙に類するものか？）に入れられていたものと思われる。

３は平根鏃で，いわゆる変形圭頭斧箭式の鉄鏃である。現長で１６.１cm，矢柄部分までの長さは10.４cmである。身の最大幅は２.６cm，茎部幅は０.４cmで，身の厚さは０.３cmを計る。４～１０は同型鏃で，逆刺のある柳葉式のものである。いうなれば，細根柳葉箆被式小爪付とでもいうものである。現長で，４は１９.０cm，５は１８.４cm，６は１７.６cm，７は１１.７cm，８は１３.０cm，９は１４.３cm，１０は１１.３cmを計る。矢柄部分までの長さはほぼ等しく，１１.７～１２.０cm，身の最大幅は１.０～１.３cm，茎部幅は１cm前後，茎部の厚さは０.３cm，身の厚さは０.２cmで共通する。

第 1 表　築池地下式古墳群一覧

番号	調査年月日	構造	方位	被葬者	副葬品	備考
1	S48. 3. 28	方形状？	西～東	1体	剣(1)	文献註(1)
2	S52. 4. 30	片袖・妻入り型寄棟造り	北～南	〃	直刀(1)，刀子(1)，鉄輪(1)	〃 (2)
3	S53. 5. 30 ～ 31	〃	西～東	〃	剣(1)，直刀(1)，平根鏃(1)，細根鏃（10以上）	本報告

Ⅳ まとめ

先にも記した如く，築池地区は地下式古墳の群集する地である。これまで明らかにされたこの地の地下式古墳は2基あるが，本報告の地下式古墳を含む3基についての構造・副葬遺物等については第1表の如くである。

この内，番号1（48年調査）については，その所在位置が明瞭ではないが，番号2（52年調査）については第2図の如く，今回調査地下式古墳より南々東約70mの地点である。これら3基に直接的に共通する副葬品はないが，番号1における剣，番号2における直刀，今回の剣，直刀はいずれも柄部を細い糸巻きによって形作るという共通性が認められる。これら副葬品の種類の相違にみる問題点は，築池地区に所在する地下式古墳の今後の類例化と，地下式古墳の集合の単位の認定という作業化の中で検討されねばならないと思う。現在のところ，時期差の問題もあるが，これら3基は互いに異なった集合の単位の中にあるように思われる。

さて，今回出土した細根鏃について，逆刺のある柳葉式の鏃はこれまで小木原地下式横穴3号[(3)]，久見迫1号，7号[(2)]からの出土があるが，最も小木原地下式横穴3号のものに近いものである。

（北郷　泰道）

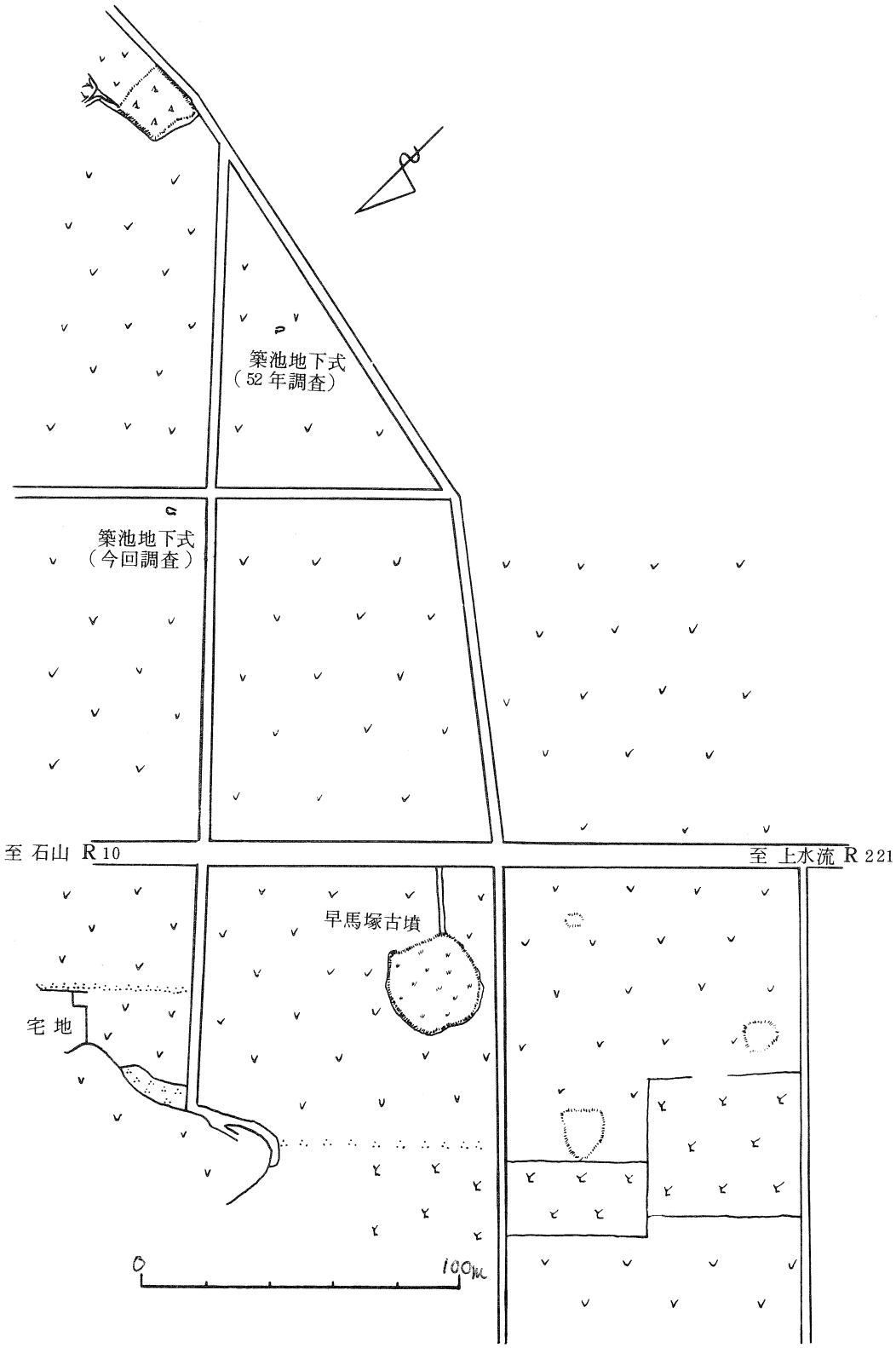
（註）

(1) 日高　正晴　「下水流地下式墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集（S52）

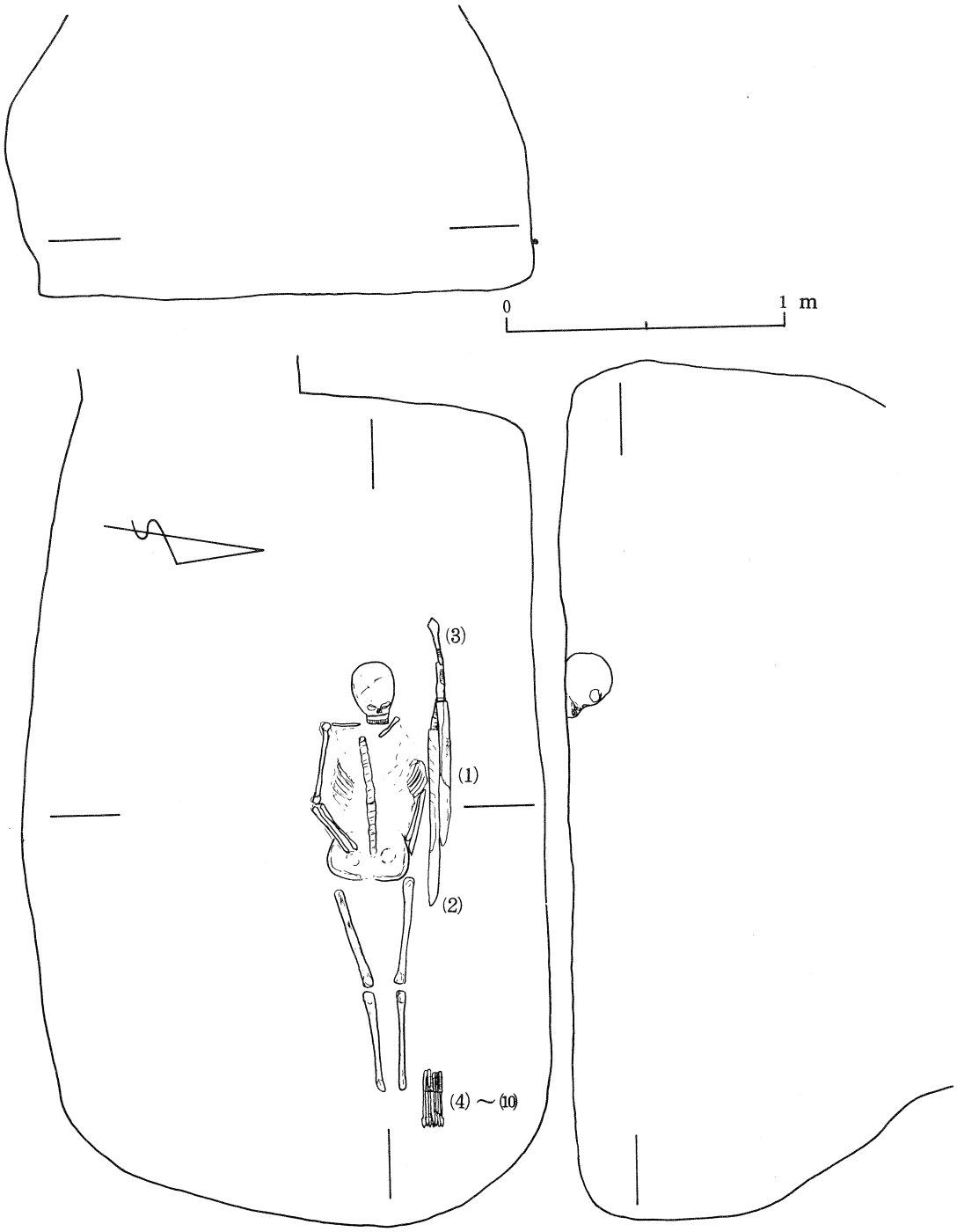
(2) 岩永　哲夫・田ノ上　哲　「築池地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集（S53）

(3) 田中　茂　「えびの市小木原地下式横穴3号出土品について」『研究紀要』No.2　昭和48年度宮崎県総合博物館（S49）

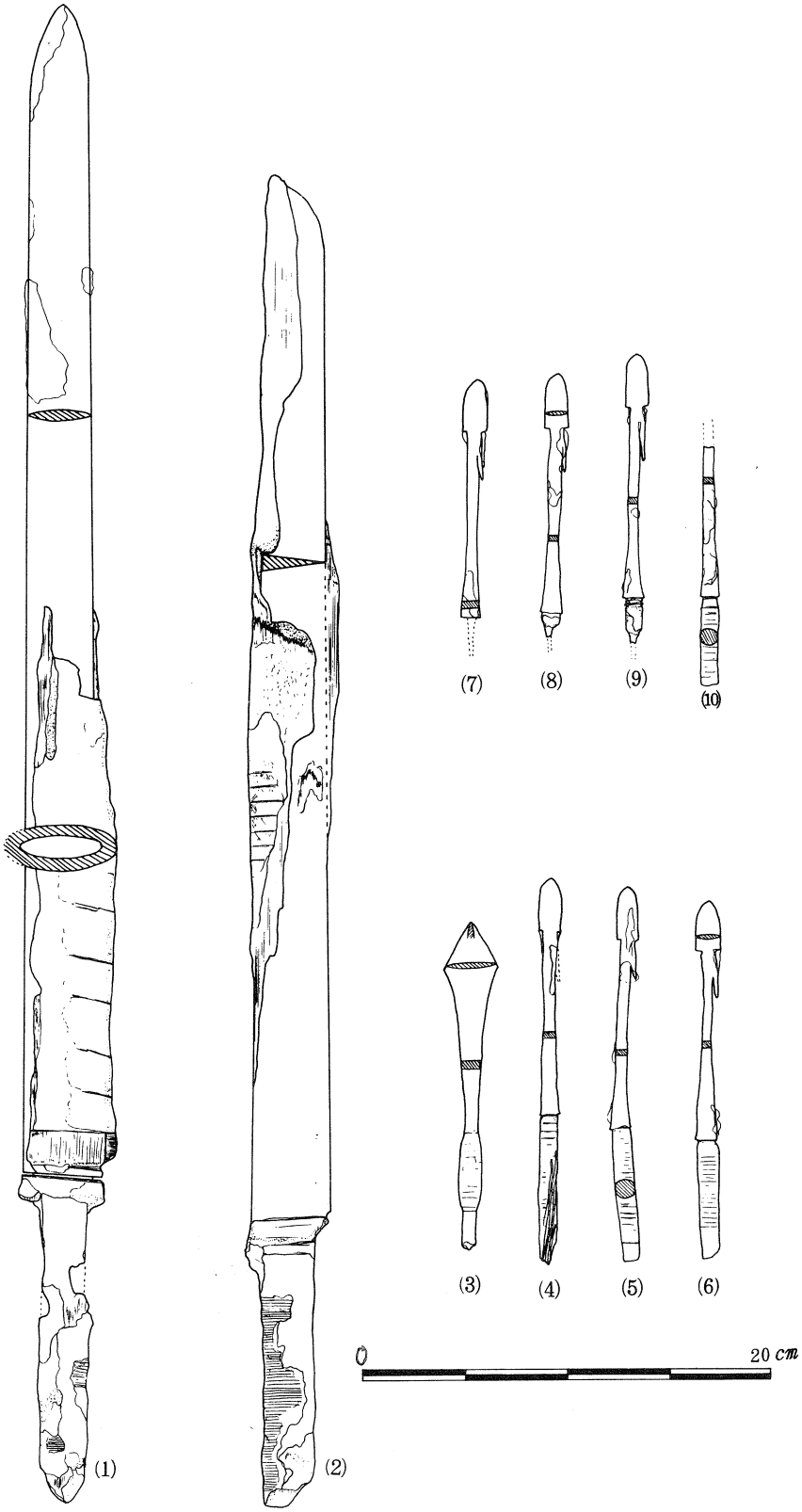
(4) 「久見迫遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1)』（S47）
ただし，久見迫7号出土のものは細根三角形鏃に類する。



第2図　地下式古墳周辺地形図



第3図　地下式古墳及び副葬品出土状態図

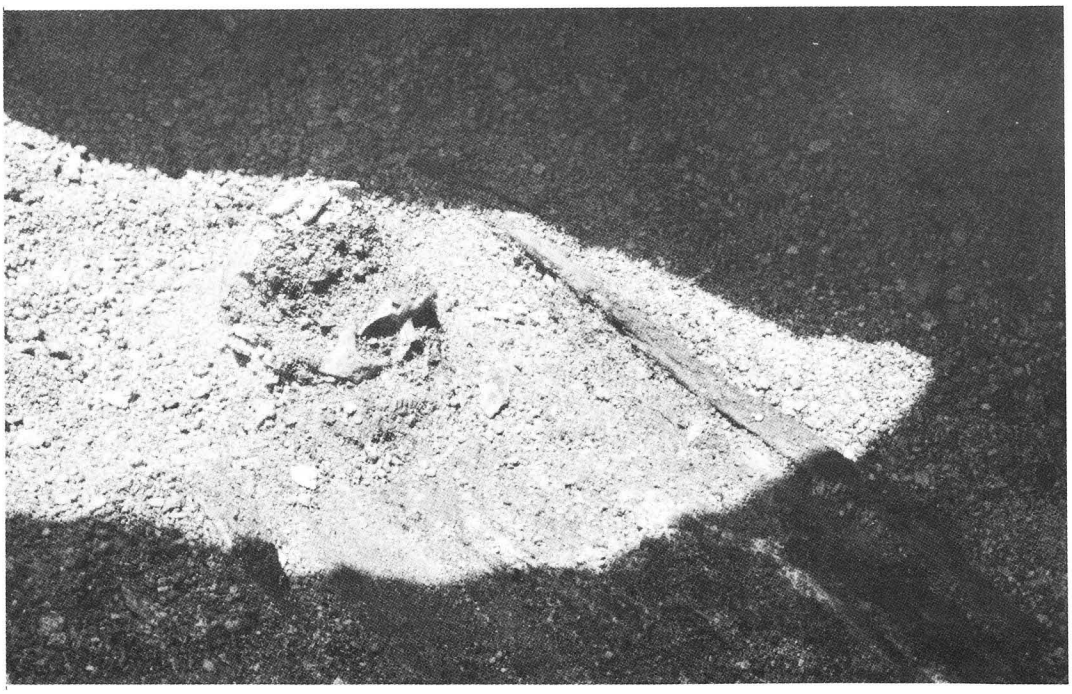


第４図　　副葬品実測図

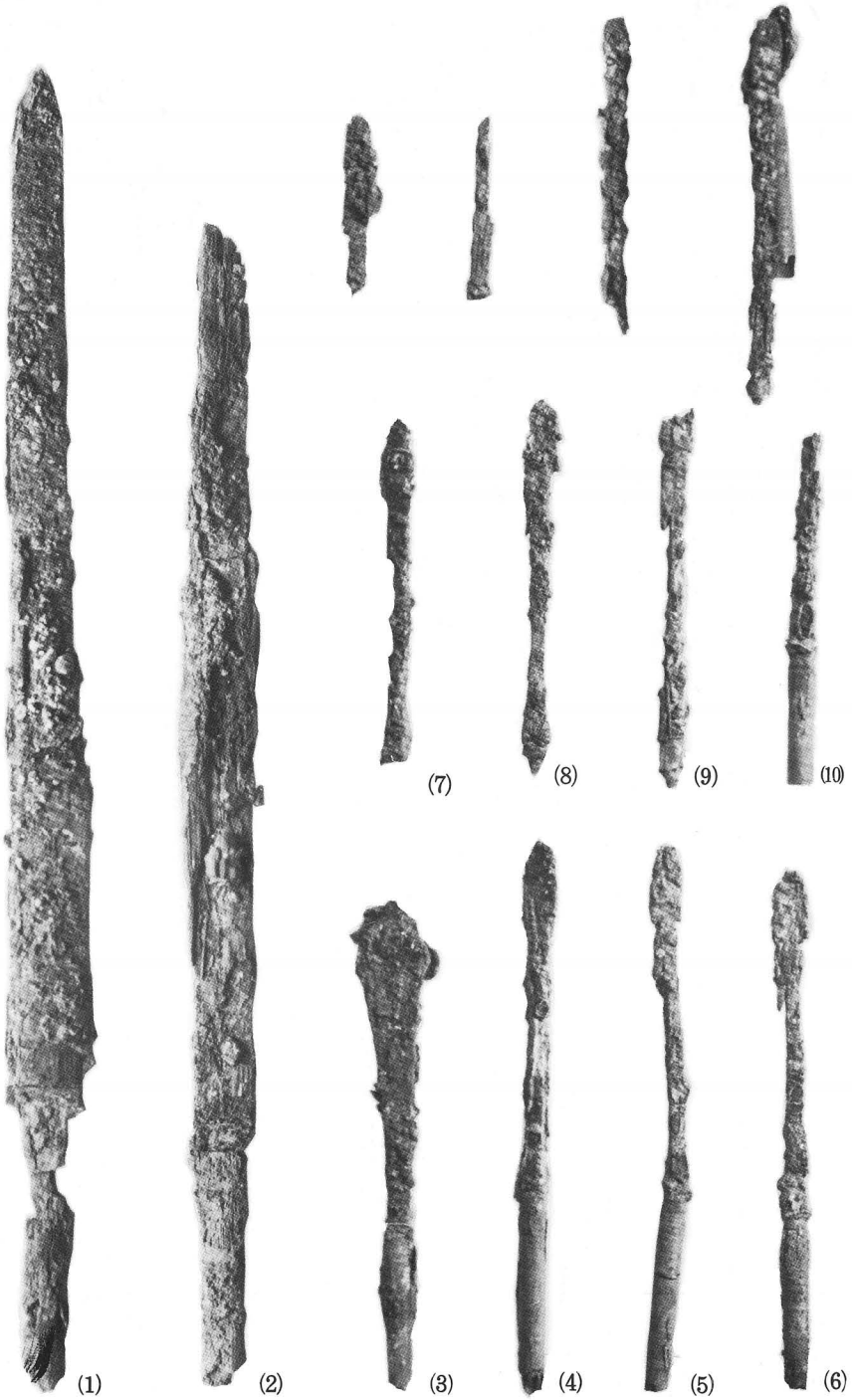
(1) 早馬塚古墳をのぞむ（矢印今回調査）

(2) 陥　没　個　所

(1) 発 掘 作 業 風 景



(2) 人骨及び副葬品出土状態



副　　葬　　品

091

宮崎県文化財調査報告書
第　21　集
発　行　昭和54年3月31日
宮崎県教育委員会
編　集　宮崎県教育庁文化課